

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名 (推進地域)	愛知県	番号	23
-----------------	-----	----	----

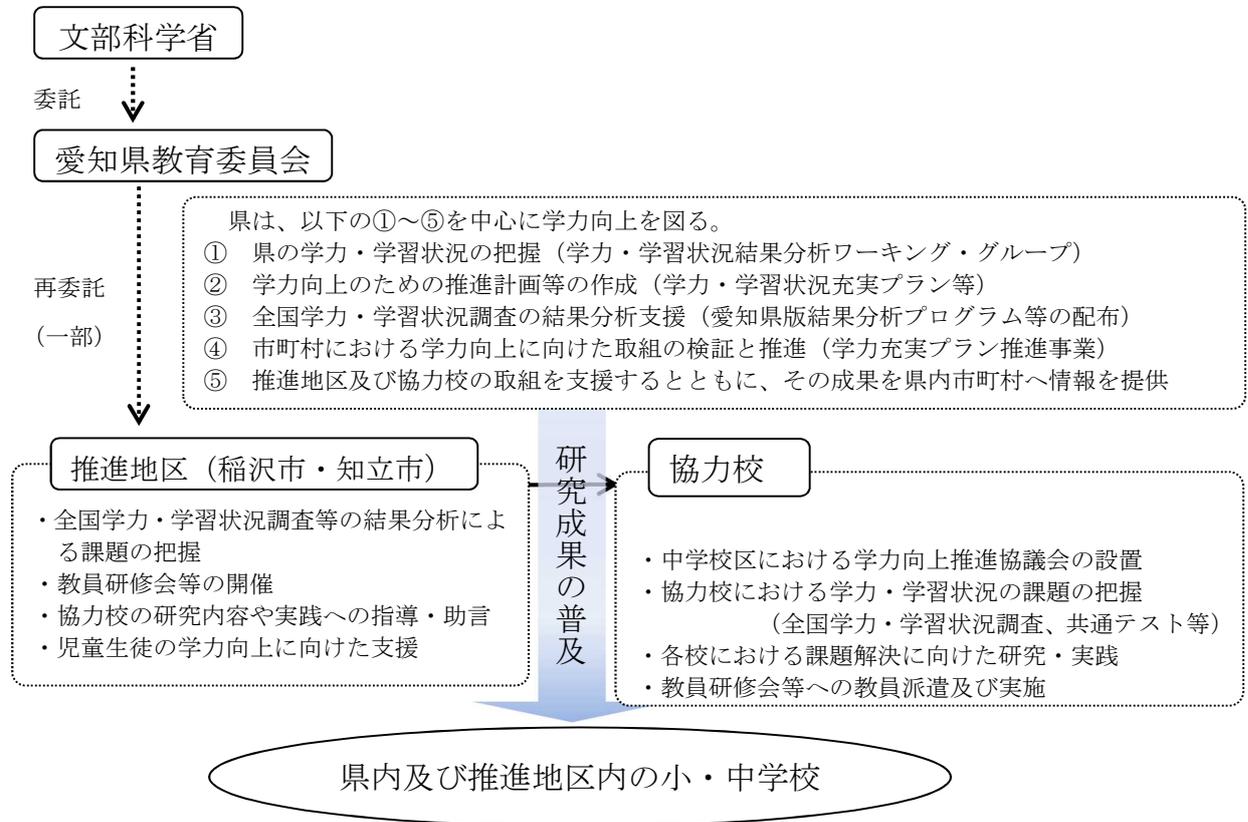
市町村名 (推進地区名)	協力校名	児童生徒数
稲沢市	稲沢市立祖父江中学校	575
	稲沢市立祖父江小学校	177
	稲沢市立領内小学校	310
	稲沢市立長岡小学校	128
知立市	知立市立知立小学校	849
	知立市立猿渡小学校	382
	知立市立来迎寺小学校	672
	知立市立知立東小学校	278
	知立市立知立西小学校	730
	知立市立八ツ田小学校	414
	知立市立知立南小学校	629
	知立市立知立中学校	732
	知立市立竜北中学校	708
	知立市立知立南中学校	611

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 推進地域としての体制の整備

県は、本事業の推進地域として、下のような体制を整備し、学力定着に課題を抱える学校への支援に関する調査研究を進めた。



(2) 県の学力・学習状況の把握

県教育委員会義務教育課と愛知県総合教育センター合同で、「学力・学習状況結果分析ワーキング・グループ (以下「ワーキング・グループ」という)」を組織し、全国学力・学習状況調査の問題及び結果の分析、「愛知県版結果分析プログラム」の作成を行った。

- ・ 「学力・学習状況充実プラン」等の作成で、ワーキング・グループの分析結果を活用。
- ・ 「愛知県版結果分析プログラム」は、市町村や学校が、文部科学省から提供されたデータを読み取り、結果分析に必要な表やグラフを作成するエクセルファイルで、それぞれの結果分析を支援。

(3) 愛知県学力向上推進委員会の設置と推進計画等の作成

愛知県学力向上推進委員会を組織し、協議を通じて、学力向上のための推進計画である「学力・学習状況充実プラン」の充実を図り、推進地区や協力校及び県単独で行う「学力充実プラン推進事業」の実践地区の取組に対する指導助言を行った。

ア 愛知県学力向上推進委員会について

<構成> 教職大学院教授、県小中学校PTA連絡協議会役員、県生涯学習関係機関主査、推進地区教育委員会指導主事、協力校代表校長、県総合教育センター研究指導主事

<協議・報告内容>

- 第1回
- ・10月までの県の取組について報告
 - ・「学力・学習状況充実プラン」の構成・配付計画及び「小・中学校版学力・学習状況充実プラン」の内容について検討
 - ・推進地区の取組状況について検討

※ 委員会で決定（確認）した主な事項

- ・学力向上に向けた本年度の取組の重点として「分析・検証の充実」「実効性のある学校支援」「研究成果の積極的な活用」を実施していく。
- ・実効性のある学校支援のため、11月に『小学校版学力・学習状況充実プラン』、12月に『中学校版学力・学習状況充実プラン』、2月に『学力・学習状況の充実に向けたガイドライン』というように3回に分けて配付すること」等を確認した。
- ・本調査研究の推進地区に対して、小・中の接続を意識した取組や学校と家庭が連携した家庭学習を一層推進すること、児童生徒の基礎学力の定着のための市の取組についてのポイントを絞った授業改善を行うことを助言した。

- 第2回
- ・1月までの県の取組について報告
 - ・「小・中学校版学力・学習状況充実プラン」について報告
 - ・「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」の報告
 - ・推進地区（稲沢市・知立市）の報告書について検討

※ 委員会で決定（確認）した主な事項

- ・「改善の指針」を原案の三つの柱に絞って作成し、2月に県内に配付したことを確認した。
- ・本調査研究の推進地区、協力校の報告の内容については、県の「学力・学習状況充実プラン」と関連させ、市が行った授業力向上のための研修会、小・中が連携した取組、学校と家庭をつなぐための市の取組について焦点を絞ってまとめ、全県に広めていくよう助言した。

イ 「学力・学習状況充実プラン」について

愛知県学力向上推進委員会で委員の指導・助言を受け、「学力・学習状況充実プラン」の内容、まとめ方、配付方法などについて、実効性のある支援、研究成果の積極的活用を図った。

また、「学力・学習状況充実プラン」は、推進地区及び協力校の取組を生かした内容を取り入れた。逆に、推進地区及び協力校が新たな教育施策や指導改

善を行うための具体的な支援として、改善の方向性や方策を示した。

① 「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」(2月配付)

県の課題解決のための方策として、「各市町村・学校が実態に応じて必要な手立を講じることで、教師の授業力を高め、児童生徒の学力向上を図る」ため、次の3点を呼び掛けた。

改善の指針Ⅰ 「自ら課題を解決できる思考力・判断力・表現力等を育てましょう」(授業改善)

改善の指針Ⅱ 「児童生徒の実態を全職員で把握し、カリキュラム・マネジメントの充実を図りましょう」(学校体制づくり)

改善の指針Ⅲ 「学校を中心に家庭・地域と一体となった教育を推進しましょう」(地域連携の推進)

② 「愛知県全体のまとめ」(2月配付)

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果分析、課題の改善の方向性等(③~④の内容)をまとめた。

③ 「学力・学習状況充実プラン(小学校版)」(11月配付)

小学校調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまとめた。

④ 「学力・学習状況充実プラン(中学校版)」(12月配付)

中学校調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまとめた。

⑤ 「質問紙調査のまとめ」(2月配付)

質問紙調査の結果から明らかになった課題や課題解決のための改善のポイント等をまとめた。

⑥ 「授業アドバイスシート」(プランと同時に配付)

明らかになった課題解決のための具体的な取組のポイントや授業アイデア、授業で活用できるプリント等を作成した。

⑦ 愛知県版結果分析プログラム活用マニュアル(9月配付)

結果分析プログラムの使い方や作成した表やグラフを活用した分析方法をマニュアルとしてまとめた。

ウ 県の取組の積極的な活用に向けた取組

<全県に向けた課題分析研修会(学校教育担当指導主事会)>

① 日 時 平成28年10月7日(金)

② 参加者 県内53市町村教育委員会指導主事、県関係者

③ 研修内容

「平成28年度全国学力・学習状況調査 愛知県の結果について」

・各調査区分の分析結果について

・児童（生徒）質問紙の質問項目における回答の状況について
 <各教育事務所単位の研修会>

① 日時・場所等

期 日	時間	地 区 名	場 所	参加者	参加者数 (人)
11/28 (月)	14:00～ 14:40	知多地区	知多教育事務所	担当指導主 事	26
12/1 (木)	15:00～ 15:40	尾張地区	三の丸庁舎	担当指導主 事	34
12/2 (金)	9:30～ 10:10	東三河地 区	東三河県庁	担当指導主 事	40
12/9 (金)	9:45～ 10:25	西三河地 区	西三河教育事務 所	担当指導主 事	64
12/13 (火)	10:00～ 10:40	中島地区	稲沢市役所	担当指導主 事	2
12/16 (金)	9:00～ 9:40	海部地区	海部教育事務所	担当指導主 事	16
12/20 (火)	13:30～ 14:10	丹葉地区	三の丸庁舎	担当指導主 事	14

② 研修内容

「学力・学習状況充実プラン（小学校版）」「授業アドバイスシート」を
 使った研修を実施

- ・ 分析プログラムを使った地区の結果分析の仕方について
- ・ 調査から見えてきた課題と授業アドバイスシートについて

<地域の要請に基づいた研修会>

① 日時・場所等

期 日	時間	地 区 名	場 所	参加者	参加者数 (人)
12/5 (月)	9:00～ 10:00	あま市	あま市役所	校長	22

② 研修内容

各地区の調査の結果を使って研修を実施

- ・ 教科に関する調査の各調査区分の平均正答率による分析について
- ・ 学力・学習状況充実プラン小学校版の概要に

全市町村に対し、丁寧に「研究成果の積極的活用」を呼び掛けた成果とし
 て、単独で教育事務所が課題研究会を実施したり、市町村の校長会や教務主
 任者会等で、県が発出した学力・学習状況充実プランや結果分析プログラ
 ムの活用マニュアルを使った研修会等を実施したりする市町村が増えてきた。

また、各市町村には、県の取組を参考にして、独自の授業改善の取組や学力向上推進委員会を立ち上げた地区も増えてきた。

2. 推進地区における取組

推進地区においては、それぞれ次の取組を実施した。

<稲沢市>

(1) 基礎基本の定着、主体的な学びを促す授業の工夫、教師の指導力向上に向けて

① 協力校による授業公開の開催

9月30日(金)	長岡小学校	6年生	国語
10月19日(水)	領内小学校	4年生	算数
10月31日(月)	祖父江小学校	1年生	算数
12月15日(木)	祖父江中学校	1年生	国語

それぞれの授業では、その1時間で教師も児童生徒も何ができるようになればいいのかを把握して授業に取り組むように「めあてとまとめ」の板書をする
こと、児童生徒がどの程度めあてを達成できたのかを把握するための「振り返り」
を行うことを必ず設定することとして授業研究を行った。指導案については、
事前配付とし、参観者は事前に指導内容を把握するとともに、発問の工夫や考
える場等がどのように設定されているのかなどを把握した上で授業参観を行
うこととした。授業参観後には、「めあてとまとめ」「振り返り」「発問の工夫」
や「考える場の設定」など、あらかじめ決定した視点での良かった点と改善
点について参観プリントに記入した。授業後に協議会を行い、それぞれ発表
するとともに、それぞれの学校に持ち帰り、還元報告をする機会をもつよう
にした。また、市教育委員会でも参観プリントをとりまとめ、今後の指導助
言の参考とした。

② 学校代表者会での指導助言

各校の代表者が集まる学校代表者会では、各校での取組状況を報告してもら
い、各学校で還元をするとともに、生かせることは取り入れていくよう助言
した。

③ 指導主事による学校訪問

授業参観以外に、学期に1回、協力校を訪問し、学校の基礎・基本の定着に
向けた取組状況を把握し、指導助言を行った。

④ 研修視察

協力校の教員に、学力定着に関する研究推進校や研究発表会への参加を促す
とともに、研修視察を実施した。研修視察後には、勤務校で報告会を行うと
ともに、教務主任会議においても報告会をもった。特に児童生徒が主体的に活
動するための取組について重点的に報告してもらうことにより、児童生徒の主
体的な学びにつながる工夫について各校の参考となるようにした。

⑤ 研修会

教師の授業指導力の向上に向けて、協力校の全ての教員が参加する研修会を実施した。ここでは、はじめに全体会を実施し、研究の目的や取組内容、これまでの研究の流れを確認するとともに、協力校の学校代表者会や第1回学力推進委員会の報告を行った。また、県から出された全国学力・学習状況調査の授業改善に向けて出された「学力・学習充実プラン」「授業アドバイスシート」の積極的な活用を促した。

今回の研修会では、学力定着に向けてのスキルを学ぶとともに、次年度、推進地区として取り組むべき課題を見付けることも意識して実施した。

<知立市>

知立市学校教育スタンダードとして、「活用力（言語活動）」「粘り強さ（最後まで頑張る）」「生活・学習習慣」の三つを重点項目とし、市内全教員が大事にしたい教育的内容を共有し、学習指導・生活指導を行う。

上記のように研究課題を設定し、推進地区として次のことに取り組んだ。

- (1) 協力校ごとに全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（CRT・NRT）の結果から課題を把握し、知立市学校教育スタンダード「かきつばた」の五項目から各校の重点項目を設定した。そして、重点項目における教師の力量を高めるために、外部講師を招聘し、研修や授業研究を行った。
- (2) 若手教員の授業力を高めるために、日頃の授業での工夫点や問題点についてのグループ協議を行い、元公立小学校長の講師から個を伸ばす授業のあり方について講義を受ける研修会を設けた。また、愛知県学力向上推進委員会委員長の佐藤洋一愛知教育大学教職大学院教授を招き、今年度の各学校の取組や家庭学習のあり方を見直す教務主任の研修会を行った。
- (3) ペアやグループでの話し合いを効果的に深めるために、学習ボードを自作し、全小中学校に配布して授業で活用した。学習ボード上で考えをまとめたり、見せながら分かりやすく発表したりすることができ、対話的で協働的な学習を行うことができた。
- (4) 全国学力・学習状況調査の問題を市内全ての教員が実際に解く機会を設け、どのような力が求められているのか、どのような学習が必要なのか再確認し、授業改善に取り入れるように努めた。
- (5) 家庭学習を奨励し、その定着を図った。また、長期休業前には自作した国語・算数の振り返りテストなどを行い、一人一人の子供がつまづいている学習内容を個人懇談で保護者に説明し、子供の学力が高められるように家庭学習のポイントの示唆を与えた。

3. 協力校における取組

協力校においては、次の取組を実施した。

<稲沢市>

(1) 基礎・基本の定着に向けて

① 指導案の工夫

授業研究における指導案の形式は、稲沢市の指導案例を基にして、本校の研究のねらいや授業の特徴が明確になるように以下のような工夫をした。

ア 単元について

めざす生徒の姿をはっきりさせて授業を行えるように、「生徒の現状」を分析し「付けさせたい力」を決め、この2点を明記した。

イ 本時の目標と評価

目標を達成したときの生徒の具体的な姿を想定し、それを評価基準として指導案に示した。

ウ 『〇〇する力』を身に付けさせるための手立

授業者のねらいを基に、本時の授業で身に付けさせたい力を示し、それを達成するための手立を各教科部会で検討し、示した。

エ 指導過程上の手立

③で示した手立を扱う場面を波線で示し、この場面の教師の発問や子供たちの様子を中心に研究協議会を行った。

オ 板書計画

学習のめあて（本時の目標）とまとめ(振り返りに必要な内容)については必ず板書に残すように定め、授業の流れが確認できるように板書計画を示した。

カ 児童の意識の流れ（予想される反応・発言）をもとにした指導案の作成

② 学習習慣の確立

- ・ 五つの学習スローガン①用具の準備、チャイム着席②机の上はすっきり整頓③はっきり大きな声で「はい」「です」「ます」④背すじを伸ばして書く、話す人の目を見て聞く⑤あいさつは心をこめて を決めて全校で意識して取り組んだ。
- ・ 学力向上の基本は落ち着いた学習習慣であると考え、授業の基本となる「祖中三箇条」として、「返事・姿勢・発表」という言葉を年度初めの学年集会などで生徒全体に呼び掛けた。

③ 授業の流れの共通化

授業の見通しをもたせるために、課題学習のめあてを「め」として板書に示すようにする。また、本時のまとめについても「ま」としてまとめた板書をする。そのことで、児童には視覚的にも1時間の学習内容の流れの明確化を図るようにした。学期途中からの「め」「ま」であったため形式の統一には無理があったが、「めあて」や「まとめ」を意識した授業展開を行うことができた。また、振り返りの学習の設定し、学習の終わりに、振り返りの時間を設定し、自分の言葉で分かったことを書くようにした。書くという作業を通して、分かったことを自分の中できちんと整理する活動を重視し、同時に授業者の授業の評価にも活用し、次時の授業に活かしていくようにした。

④ 学習環境の統一

- ・ 教室に「声のものさし」「ハンドサイン」「発表の仕方の話形」「発表の聞き方」を表示した掲示物を貼り、学校全体で統一して学習環境を整えた。低学

年においては授業の中で常に意識するように指導し、習慣化を試みた。

- ・ 学級用の掲示物を作成し、生徒の目に常に触れるように、全ての学級に掲示した。そして、授業や学級の時間などで折に触れて声を掛けていき、生徒が常に意識できるように心掛けた。

⑤ 基礎学力コンクール等の実施

- ・ 基礎学力の定着を図ることを目的とし、国語と数学で全学年全学級において基礎的な学力テストを繰り返し実施した。毎朝10分間行っている朝学習の時間を利用し、10月から月1回のペースで以下の様なスケジュールで計画的に学習に取り組ませた。

日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
内容	勉強(国語)	勉強(数学)	勉強(国語)	テスト(国語) 余った時間で 勉強(数学)	テスト(数学)

国語では言語活動の基盤となる「語彙力」を、数学では中学校で行う学習活動の基盤となる「計算力」を基礎学力と定めて問題を作成した。

- ・ 各学年の児童の学力状況に応じた内容で、奇数月に漢字コンクールを、偶数月に計算コンクールを行った。家庭で目標をもって学習に取り組むことができるようあらかじめ出題される問題とテストを行う日時を知らせておき、その日に向けて計画的に学習できるようにした。
- ・ 9月、1月の長期休業後に「がんばり大会」復習テストを実施している。これは1学期、2学期の学習した内容を復習させるためのテストで、既習事項の定着を確認するためのものである。
- ・ テストを活用して定着の度合いを把握し、基礎的・基本的な内容で理解が不十分な内容に対して繰り返しの学習による定着を図った。特に学期末のまとめのテストを活用して、基礎的な内容の定着ができるように重点的に対応した。

⑥ 朝学習、朝読書

- ・ 月・水・金の8時15分～8時25分の10分間を朝学習の時間として設定し、漢字練習や計算練習等の基礎的基本的な学習の定着を図った。基礎的基本的な内容に絞ったプリントを活用し、計画的に進めた。
- ・ 火・木の8時15分～8時25分の10分間を朝読書の時間として設定し、学校図書館や学級文庫等の本を活用して、読書に親しませてきた。学習の土台となる文字や文章に対する抵抗を少なくし、語彙力を付けるようにしてきた。

(2) 主体的な学びを促す授業

- ・ 課題を把握し、改善するために、全国平均に比べ数値の低かった学習状況調査について調べ、その対策を考えることにした。その中で特に数値が低かった項目は、「家で、学校の予習をしていますか」、「国語の授業で意見を発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか」、「算

数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」、「算数の授業で問題の解き方が分かるようにノートに書いていますか」等であった。そこで、これらの項目について、どうすれば改善できるのか、方策、手立等を話し合い、実践していった。

- ・ 現職教育による「読解力・思考力・表現力」の育成の取組
言語活動の工夫を通して、「読解力・思考力・表現力」の育成に力を入れてきた。特に、年間を通して計画的に「書く」という手立により、読解力や表現力の育成に取り組んできた。
- (3) 家庭学習の手引き
- ・ 基礎学力を向上させるには、家庭学習の習慣を定着させることが欠かせない。家庭での協力が得られるよう「家庭学習の手引き」を全家庭に配付した。手引きには、育てたい児童の姿や家庭学習のポイントを各学年ごとに示した。また、各学年ごとの家庭学習の時間のめやすや、家庭学習の方法例を具体的に示すことで、学校と保護者と児童が同じ目標をもって家庭学習に取り組めるようにした。更に、家庭学習チェック表を用いて家庭学習開始時刻と学習時間を記入することで、家庭学習の習慣化を啓発した。
 - ・ 4月当初、現職教育で各学年の発達段階に沿った適切な学習時間や学習の量、学習内容について検討した。4月下旬のPTA総会後に実施する学年懇談会の資料に、家庭学習についての手引きを掲載し、懇談会で説明を行い協力を求めた。学校全体で家庭学習の内容など統一するところまではできていないが、学年ごとの適切な学習時間を設定し、学年ごとの家庭学習の量の意識化を図ってきた。

<知立市>

- (1) 全小中学校で、平成28年度の全国学力・学習状況調査の結果や小学校では昨年度2月に、中学校では4月下旬に実施した全国標準学力検査(CRT・NRT)の結果を分析し、各学校の子供たちが抱えている学習上の問題点を全教員で検討し合い、各学校の実情に沿った研究主題を設定した。
- (2) 各学校の課題に応じて、その分野を専門的に研究している方を外部講師として招き、校内研修会や授業研究会を行い、教師の授業力向上に努めた。
- (3) 市内のほとんどの学校が課題としている書く力を付けるために、学習ボードを活用した手立の工夫や関わり合いを大切にした授業展開のあり方を研究した。また、話す力・聞く力を付けるために、ペアトークやグループトークなど業前活動に取り入れ、授業時間だけでなく、子供が楽しみながら力を付けられるように指導の工夫を図った。
- (4) 学校だより、保健だより、学年通信等で、家庭学習の大切さや規則正しい生活習慣や正しい姿勢の意義を保護者に啓発し、定着への協力を働き掛けた。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

<稲沢市>

(1) 小・中学校合同の研修会の実施

冬季休業中に行った研修会では、演習を交えながら指導技術について学んだ。「授業の原則」と「家庭学習の在り方」を中心に、子供たちへの具体的な支援の方法についての助言をいただくことができた。授業において生徒が「できる」ようになるための手立だけでなく、「できる」ようになったことをその後も維持する、いわば定着させるための手立について様々な提案をいただいた。今後の実践に向け、教員の意識や授業力の向上につながったと考えられる。

(2) 教師の指導力向上を図る

月に1回の授業研究を行った後に、授業反省会をもち、授業のねらいの沿った指導であったか、手立や活動は有効であったかなどの点について協議した。また、授業研究ではワークショップ形式での研究協議会を短時間で行うことで経験年数の少ない教師へのアドバイスをしたり、他校の研究授業や学力向上に関する指導の研究、先進校の公開授業に参加したり、基礎・基本の大切さや主体的に授業に取り組む姿勢を学んだ。

<知立市>

(1) 学校教育スタンダード

知立市学校教育スタンダードを教師がよりいっそう意識することができ、子供たちの思考力や言語力を高めることができた。

(2) 自作教材の活用

学習ボードや思考ツールを活用することで、子供たちは自信をもって考えることができるようになり、互いの意見を尊重し、深く関わり合いながら学習を進めることができるようになった。

(3) 家庭との連携

家庭学習の大切さを家庭に啓発し、意欲的に取り組むことができるように課題の出し方を工夫したことで、家庭学習に進んで取り組む子供が多くなった。

2. 実践研究全体の成果

推進地区の取組の成果については、次のとおりである。

<稲沢市>

(1) 標準学力検査(CRT)の平成27年度と平成28年度の結果を比較することで成果を検証する。

理解の得点率が、平成27年度に比べて高まった。協力校では、朝の学習内容とリンクさせた学力コンクールや基本的な事項の内容の定着を図る学習に継続して取り組んだ。このことにより学ぶ習慣が付き、知識・理解が定着し、その定着がさらなる関心・意欲の高まりにつながったものとする。

また、どの協力校でも、必ず「めあて」を板書することで、児童生徒、教師が

ともに何ができるようになっていけばいいのかを確認して学習に取り組んだことや、それが身に付いたかどうかを「まとめ」で確認したり、「振り返り」によりそれぞれの児童生徒が1時間の達成度を確認したりしながら授業に取り組むサイクルを継続して取り組んだことも成果の一因であると考えます。

(2) 研修会

教員の授業指導力向上に向けて、12月26日に協力校の全職員対象で、研修会を行った。学力を定着させるための授業改善の提案、家庭学習の再考について講義を受けた。研修者からは、「児童生徒から意見を引き出せるような授業を展開していかなければいけない」、「授業の中での具体的な指導についての講義であったので、3学期の授業でさっそく取り入れてみたい」など、前向きな発言を聞くことができた。その中で児童生徒に出力させることや実態把握をし、「できない」を「できる」ようにさせることが大切であることが強調されていた。

<知立市>

協力校の学校評価アンケート結果において、「授業が楽しい」「授業が分かりやすい」と回答した子供や教師の割合が、平成27年度より平成28年度の方がともに上回る結果を得ることができた。本研究で取り組んだ外部講師を招いた研修会や授業研究を通して、教師が授業のあり方を見つめ直し、より子供目線で発達段階に即した授業を行うことができたからだと考える。また、全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査の結果を分析し、共有化したことで、授業で身に付けさせたい力を焦点化し、授業改善や教材教具の工夫を図ったことも一因だと考える。教師の授業力が高まり、子供たちは楽しく学び、分かったことが増えたので、自己肯定感が高まり、より積極的に学習に取り組み、学力の向上につなげることができた。

また、「家庭学習の習慣が身に付いている」と答えた教師の割合が、平成27年度より18.3ポイント増加している。子供たちの家庭学習への取組について教師が手応えを感じている結果が得られた。しかし、子供自身の回答の割合を見ると、肯定的な回答が80パーセント以上と高い割合を示しているが、その割合は昨年度とほぼ変わらない。逆に、昨年度と同様に、およそ5人に1人の子が家庭学習をしていないと答えていて、改善されていない。その子供たちにとって、家庭学習を行うことに価値を見出すことができず、継続的に取り組めていないことが分かる。全ての子の学力を向上させるために、家庭学習の啓発の仕方を今後検討していかなければならない。家庭学習に取り組む時間や量だけに注目させるのではなく、家庭学習に価値を見出し、主体的に取り組む態度や心情を育てていきたい。

3. 取組の成果の普及

推進地域では、協力校で取り組んだ実践内容を、市校長会、市教務主任会や要請のあった学校で報告会を実施し、教員の学力向上対策への意識付けを図った。

また、指導主事による学校訪問の際に、協力校で取り組んだ実践内容を他校に紹

介し、学力向上の対策について共通認識に努めた。

愛知県学力向上推進委員会において有識者の意見を取り入れることで、「学力・学習状況充実プラン」が県内の各校で活用しやすい内容になった。また、推進地区の担当者が、愛知県学力向上推進委員会の構成員であったため、委員会で協議された内容が推進地区や協力校ですぐに活用できる体制ができたことも本調査研究の成果である。

県は、推進地域の取組として、平成28年度は「学力・学習状況充実プラン」において「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」を策定し県内の市町村や学校に示した。その作成に当たり、推進地区や協力校の取組から、改善の指針Ⅱのポイントとして、校内体制として、児童生徒の実態を全教職員で把握し、カリキュラムマネジメントの充実を図ることを盛り込むことができた。また、改善の指針Ⅲのポイントとして「学校と家庭での児童生徒の様子を共有し、家庭での計画的な学習習慣を身に付けること」や「小・中学校合同の研修や連携による接続の工夫」について継続的な取組として位置付けることができた。これらも、愛知県学力向上推進委員会で推進地区及び協力校の取組について協議してきた成果である。

「学力・学習状況充実プラン」に掲げた課題解決のための取組を実践した例として、3月末には、本調査研究の推進地区や協力校及び「学力充実プラン推進事業」の実践校の取組を義務教育課Webページで紹介していく。

次年度は、県内の小・中学校における課題解決に向けた取組について、更に研究を進め、学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援の在り方を明らかにしていきたい。

<稲沢市>

平成28年度の取組について、協力校の代表者会、市内の校長会議、教務主任会議において報告を行い、成果や課題について各校へ発信した。

平成28年度は、成果の普及について積極的に取り組むことができなかったの
で、平成29年度は、リーフレットによる成果の報告や協力校による授業研究の
公開等、取組の成果を市内に普及していくことができるよう計画していく。

<知立市>

- ・ 知立市の取組について愛知県学力向上推進委員会において報告し、県全域に広めることができた。また、いただいた意見を基に、本研究の方向性を改善することができた。
- ・ 知立市が取り組んだ授業実践の手立や工夫を、愛知県教育委員会のWebページに授業アドバイスシートとして掲載し普及した。

○ 今後の課題

県として示した三つの改善の指針のうち、改善の指針Ⅱと改善の指針Ⅲの具体例については、本年度の推進地区や協力校、「学力充実プラン推進事業」の実践校の取組の効果を更に検証し、その成果を紹介していく。

一方、改善の指針Ⅰ「自ら課題を解決できる思考力・判断力・表現力等の育成」

の具体的な取組については、現時点では、「授業アドバイスシート」等で指導改善例を示すことはできたが、それに対する検証を行っているわけではない。次年度以降、平成28年度「学力・学習状況充実プラン」で特に強調した「対話や話し合いを通じて、協力しながら課題を解決していく活動」に関わる実践について更に実践研究を進める必要がある。そのためにも、平成29年度から「主体的・対話的な学び」推進事業を立ち上げて、その成果を実践・検証していく予定である。

そして、愛知県全体の課題とした「思考力・判断力・表現力等の育成」や「主体的に課題を解決する児童生徒の育成」について、県や市町村がいかに支援していくことが児童生徒の学力定着につながるかについて実践研究を重ね、更に市町村の優れた取組を広く県内に還元していくことで、本県の児童生徒の学力向上につなげていきたい。

<稲沢市>

- ・ 推進地区として、協力校にどのような取組を推進していくのかということ年度当初に確認し、研究を進めていく。そこでは、主体的で対話的な深い学びという視点を常に意識して取り組むことを確認する。
- ・ 研究の成果を検証する手立を具体的に決め、協力校全体に同じスケールで検証を進めていく。
- ・ 研修会では、学力定着には児童生徒に出力させることが必要であるということ。家庭学習では、予習をさせることによって分からないところを把握し、それを基に授業を組み立て、「分からないこと」を「分かるようにする」ことが授業であるというアドバイスをいただいた。次年度は、協力校において、児童生徒の「出力のさせ方」と家庭学習では、「予習の在り方」について研究を進めていく。この取組の際に、学習したことを習得、活用し、探究するところまで高められるようにする。
- ・ 指導主事が、協力校を回って取組を把握し助言するだけでなく、各校の取組が協力校全体に有効に活用されるようなシステムを構築する。また、授業参観や研修視察についても、教師が意識を高めたり、指導力を向上させたりするなど更に充実したものとなるよう取組方法を検討する。
- ・ 第2回学力向上推進委員会において、評価についての取組が欠けているとご指摘いただいた。児童生徒の学力定着に向けての評価、教師の授業改善のための評価についても研究を進めていきたい。

<知立市>

- ・ アンケート結果より、学習状況に対する意識変化を検証することができたが、研究実践後に全国学力・学習状況調査がまだ実施されておらず、どの程度学力の定着に改善が図られたのか検証が十分にできていない。系統的な検証を十分に行い、研究の課題をより明確にして研究実践を進めていきたい。
- ・ 子供が自主的かつ継続的に取り組めるように、家庭学習のあり方や啓発の仕方を考えていく必要がある。家庭学習において何を学ぶか、どのように学ばせるかを改めて見直し、家庭学習の定着を図っていきたい。平成29年度には啓

発リーフレットを作成する予定である。

- 年10回の委員会を通して小中学校の情報交換を行うことはできたが、人的交流を図ることが十分にできなかった。授業研究を小中学校合同で行い、カリキュラムのマネジメント力を高めていきたい。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	稲沢市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

本市の平成27年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、小学校でも中学校でも全国に比べて、国語A・B、算数・数学A・Bのうち三つ以上で平均正答率が全国を下回っている学校が数校ある。質問紙調査からは、児童生徒が自分たちの意見を発表したり、お互いの考えを話し合ったりして深めあったりする活動の場が全国に比べて低いことが分かる。他にも、「授業が楽しい」「授業が分かる」と答えている児童生徒の平均正答率が高いという相関関係があることから、あたりまえではあるが、教師は児童生徒にとって「分かる授業」をしていくことが当然必要になってくる。もう一つ、学校訪問等で授業を見ていると、教師が教え込む展開で進められている様子が見られるなど、教師の指導方法にも課題がある。

そこで、現状と課題から次の3点を研究課題とした。

(1) 基礎・基本の定着に向けて

学習内容の定着には、授業のはじめに児童生徒と教師がめあて(課題)を確認し合い、全ての児童生徒が1時間の見通しをしっかりとって取り組んでいくことが大切である。また、めあて(課題)が達成できたかどうかをまとめて確認したり、授業を振り返ることで次時にいかしたりしていくことが大切になってくる。そこで、「見通しと振り返り」「めあてとまとめ」を意識した授業に取り組むとともに、児童生徒の実態に応じた分かる授業をしていくことで、基礎・基本の定着を図りたい。

また、業前の時間を活用して、朝の学習時間を設けたり、家庭学習についても、効果が上がる手だてを講じたりして、学習事項定着の一助とする取組を行っていく。

(2) 主体的な学びを促す授業の工夫

教師主体の授業では、児童生徒は受け身でやらされて、覚えるだけの授業になってしまう。児童生徒が主体となって、自ら学ぶ授業にすることで、学習したことが身に付いていく。主体的な学びを促す発問や教材の工夫、児童生徒が意見交

換をすることによって考えを深める場や時間を設定していく。

(3) 教師の指導力向上

教師の授業指導力向上のために、お互いの授業を見合う研修会を行ったり、講師を招聘しての授業指導力の向上に向けての講義を聞いたりすることで、教師の授業指導力向上を図る。

2. 研究課題への取組状況

(1) 基礎・基本の定着、主体的な学びを促す授業の工夫、教師の指導力向上に向けて

① 協力校による授業公開の開催

9月30日(金)	長岡小学校	6年生	国語
10月19日(水)	領内小学校	4年生	算数
10月31日(月)	祖父江小学校	1年生	算数
12月15日(木)	祖父江中学校	1年生	国語

それぞれの授業では、その1時間で教師も児童生徒も何ができるようになればいいのかを把握して授業の取り組むように「めあてとまとめ」の板書をする
こと、児童生徒がどの程度めあてが達成できたのかを把握するための「振り返り」
を行うことを必ず設定することとして授業公開を行った。指導案については、
事前配付とし、参観者は事前に指導内容を把握するとともに、発問の工夫や考
える場等がどのように設定されているのかなどを把握した上で授業参観を行
うこととした。授業参観後には、「めあてとまとめ」「振り返り」「発問の工夫」
や「考える場の設定」など、あらかじめ決められた視点での良かった点と改
善点について参観プリントに記入した。授業後に簡単な協議会を行い、それ
ぞれ発表するとともに、それぞれの学校に持ち帰り、還元報告をする機会を
もつようにした。また、市教委でも参観プリントをとりまとめ、今後の指導
助言の参考とした。

② 学校代表者会での指導助言

各校の代表者が集まる学校代表者会では、各校での取組の状況を報告して
もらい、各学校で報告をするとともに、生かせることは取り入れていくよう
助言した。

③ 指導主事による学校訪問

授業参観以外に、学期に1回、協力校を訪問し、学校における基礎・基本
の定着に向けた取組状況を把握し、指導助言を行った。

④ 研修視察

協力校の教員に、学力定着に関する研究推進校や研究発表会への参加を促し、
研修視察を実施した。研修視察後には、勤務校で報告会を行うとともに、教
務主任会議においても報告会をもった。特に児童生徒が主体的に活動するた
めの取組について重点的に報告してもらうことにより、児童生徒の主体的な
学びにつながる工夫について各校の参考となるようにした。

⑤ 研修会

教師の授業指導力の向上に向けて、協力校の全ての教員が参加する研修会を実施した。ここでは、はじめに全体会を実施し、研究の目的や取組内容、これまでの研究の流れを確認するとともに、協力校の学校代表者会や第1回学力推進委員会の報告を行った。また、県から出された全国学力・学習状況調査の授業改善に向けて出された「学力・学習充実プラン」「授業アドバイスシート」の積極的な活用を促した。

今回の研修会では、学力定着に向けてのスキルを学ぶとともに、次年度、推進地区として取り組むべき課題を見つけることも意識して実施した。

3. 実践研究の成果の把握と検証

(1) 標準学力検査（CRT）の平成27年度と平成28年度の結果を比較することで成果を検証する。

① 関心・意欲・態度面

A中学校	
数学関心	1年→2年
H27全国との差	5.5
H28全国との差	5.6
H27→H28全国との差の比較	0.1

各学校の標準学力検査の観点別得点率の全国との差について平成27年度と平成28年度のものを比較した。A中学校では数学で、C・D小学校では国語で、B・D小学校では算数で関心・意欲・態度面の高まりが見られた。

B小学校					
算数関心	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-1.1	-3.7	2.3	1.5	11.8
H28全国との差	1.3	-1.5	-5.6	2.9	6.3
H27→H28全国との差の比較	2.4	2.2	-7.9	1.4	-5.5

C小学校					
国語関心	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-7.6	-7.2	-11.5	1	-2.8
H28全国との差	-2.8	-9.1	-5.3	4.5	-6.4
H27→H28全国との差の比較	4.8	-1.9	6.2	3.5	-3.6

D小学校					
国語関心	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-4.8	17.7	12.7	1.7	7.3
H28全国との差	3.2	11.6	17.4	11.9	19.2
H27→H28全国との差の比較	8	-6.1	4.7	10.2	11.9

D小学校					
算数関心	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-7	9.8	12.5	1.6	8.7
H28全国との差	4.7	11.6	13.1	6.5	17.2
H27→H28全国との差の比較	11.7	1.8	0.6	4.9	8.5

② 知識・理解面

A中学校	
数学知理	1年→2年
H27全国との差	3.4
H28全国との差	4.6
H27→H28全国との差の比較	1.2

知識・理解についても、国語、算数・数学の違いはあるが、平成27年度に比べ、半数以上の学年で得点率が上がった。

B小学校					
国語知理	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	4.5	-0.5	-5	3.2	-7.1
H28全国との差	-5.1	8.2	-0.1	0.1	-6.9
H27→H28全国との差の比較	-9.6	8.7	4.9	-3.1	0.2

C小学校					
算数知理	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	1.4	0.2	-6.7	0.2	-10.1
H28全国との差	0.3	1.2	-0.7	-2	-5
H27→H28全国との差の比較	-1.1	1	6	-2.2	5.1

D小学校					
国語知理	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	2.7	5.1	-3.6	7.1	3.7
H28全国との差	4.2	1.9	3	4.9	4.2
H27→H28全国との差の比較	1.5	-3.2	6.6	-2.2	0.5

協力校各校で国語、算数・数学の違いはあるが、関心・意欲・態度、知識・理解の得点率が、平成27年度に比べて高まったことが分かる。協力校では、朝の学習内容とリンクさせた学力コンクールや基本的な事項の内容の定着を図る学習に継続して取り組んだ。このことにより学ぶ習慣が付き、知識・理解が定着し、その定着がさらなる関心・意欲の高まりにつながったものとする。

また、どの協力校でも、必ず「めあて」を板書することで、児童生徒、教師がともに何ができるようになればいいのかを確認して学習に取り組んだことや、それが身に付いたかどうかを「まとめ」で確認したり、「振り返り」によりそれぞれの児童生徒が1時間の達成度を確認したりしながら授業に取り組むサイクルを継続して取り組んだことも成果の一因であるとする。

③ その他の観点から

A中学校では国語、数学とも全体的に得点率が上がっている。

A中学校	
国語	1年→2年
H27全国との差	0.4
H28全国との差	0.5
H27→H28全国との差の比較	0.1

A中学校	
数学	1年→2年
H27全国との差	2.8
H28全国との差	5.1
H27→H28全国との差の比較	2.3

B小学校					
国語読む	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	9.4	1.2	-11.3	4.8	-2.6
H28全国との差	-5.3	7.8	-7.6	-0.8	-0.1
H27→H28全国との差の比較	-14.7	6.6	3.7	-5.6	2.5

C小学校					
国語書く	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-3.5	-2.4	-7.3	1.1	-5.9
H28全国との差	-6.8	-0.6	-1.9	1	-4.8
H27→H28全国との差の比較	-3.3	1.8	5.4	-0.1	1.1

C小学校					
算数思考	1年→2年	2年→3年	3年→4年	4年→5年	5年→6年
H27全国との差	-1.1	0.3	-4.8	-0.4	-11.6
H28全国との差	-2.8	-0.5	-1	2.9	-6
H27→H28全国との差の比較	-1.7	-0.8	3.8	3.3	5.6

B小学校では、国語「読む」観点、C小学校では、国語「書く」観点、算数「思考」の観点で得点率が伸びている。

A中学校では、指導案の工夫、B小学校は児童の意識・思考の流れを意識した授業、C小学校は、ペア学習やノート指導の工夫により成果を上げた。D小学校では、関心・意欲・態度の伸びが大きく、成果が見られた。やはり、どの協力校も教員がそれぞれの学校での取り組みについて目的意識をもって取り組むことで、成果が上がったものとする。

④ 課題

成果が出せなかった観点も多い。まず、「関心・意欲・態度」「知識・理解」については、全ての協力校の国語、算数・数学で得点率を向上させたいと考えたが、得点率の下がってしまった学年もあった。これは、推進地区としての方針について、協力校との確認が遅れたこと、学校代表者会の開催が少なく、推進地区と協力校の取組に対しての意思の疎通が図れていない面があったこと、推進地区全体でどのようなことを意識して取り組むのかということについて、協力校の教員全体の意識を高められなかったことが要因として上げられる。

また、協力校の取組や研修視察、協力校の授業参観などの取組については、学校代表者会や校長会議、教務主任会議で報告し、各校で生かすよう助言したが、その後の活用状況等について確認することなく、学校任せになってしまい助言が生かされたかどうかについて検証することがなかった。

学力定着の成果の検証についても、CRTの結果だけでなく、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の4月と12月の比較、児童生徒の意識調査や教員の意識調査、学校評価など、協力校で統一した検証方法を取り入れていくことによって、推進地区としての成果の検証をする必要があった。

(2) 研修会

教員の授業指導力向上に向けて、12月26日に協力校の全職員対象で、研修会を行った。学力を定着させるための授業改善の提案、家庭学習の再考について講義をしていただいた。研修者からは、「児童生徒から意見を引き出せるような授業を展開していかなければいけない」、「授業の中での具体的な指導についての講義であったので、3学期の授業でさっそく取り入れてみたい」など、前向きな発言を聞くことができた。その中で、児童生徒に出力させることと、実態把握をし「できない」を「できる」ようにさせることが大切であることが強調されていた。



4. 今後の課題

- ・ 推進地区として、協力校にどのような取組を推進していくのかということ年度当初に確認し、研究を進めていく。そこでは、主体的で対話的な深い学びという視点を常に意識して取り組むことを確認する。
- ・ 研究の成果を検証する手立てを具体的に決め、協力校全体に同じスケールで検証を進めていく。
- ・ 研修会では、学力定着には児童生徒に出力させることが必要であるということ。家庭学習では、予習をさせることによって分からないところを把握し、それを基に授業を組み立て、「分からないこと」を「分かるようにする」ことが授業であるというアドバイスをいただいた。次年度は、協力校において、児童生徒の「出力のさせ方」と家庭学習では、「予習の在り方」について研究を進めていく。この取組の際に、学習したことを習得、活用し、探究するところまで高められるようにする。
- ・ 指導主事が、協力校を回って取組を把握し助言するだけでなく、各校の取組が協力校全体に有効に活用されるようなシステムを構築する。また、授業参観や研修視察についても、教師が意識を高めたり、指導力を向上させたりするなど、さらに充実したものとなるよう取組方法を検討する。
- ・ 第2回学力向上推進委員会において、評価についての取組が欠けているとご指摘いただいた。児童生徒の学力定着に向けての評価、教師の授業改善のための評価についても研究を進めていきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	稲沢市立祖父江小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の平成27年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語Aの「書く」「言語」以外は、国語B、算数A・B、理科の全ての領域において全国平均を上回っていた。「書く」の領域では、文を構成する主語と述語との照応関係を捉え、文の型として適切なものを選択すること、「言語」の領域では漢字の書き取りに課題があった。また学習状況を見ると、基本的な生活習慣では、「毎日同じくらいの時刻に就寝する、起床する」が全国平均に比べて低く、睡眠時間が少なかったり、生活のリズムを保てていなかったりすることが分かった。家庭での過ごし方の中で、「読書をする」割合は全国平均より高いものの、二極化の傾向があり、「新聞を読むこと」については、全国平均に比べて低い結果となっており、家庭学習の習慣も定着していないことが分かった。

児童対象の学校生活アンケートでは、「先生は分かりやすく教えてくださいか」の質問に対する評価は高いものの、「学校の授業は好きですか」については低く、授業中、教師が一人一人に丁寧に対応しているものの、興味・関心をもって授業に臨んでいるわけではないことが推察される。以上のことから、下記の課題が明らかになった。

- (1) 本校の児童の学習態度に注目すると、教師の与えた課題には進んで取り組むものの、自ら考えたり、学ぼうとしたりする意欲に弱さが見られる。そこで児童が意欲をもち、主体的に学習に取り組めるよう教師主導から教師支援の学習スタイルへと授業改善を図り、できる喜びや学ぶ楽しさを実感させる必要がある。
- (2) 教師が授業を振り返り、基礎・基本を身に付けさせたり、主体的に授業に取り組むように意識をもたせるために、手だてを工夫することができたか、について協議し、指導のどんな点が有効なのか、何を改善すべきかということを振り返り、指導力向上を図る必要がある。
- (3) 自ら進んで学習に取り組ませるためには、それを支える基礎学力が大切である。それは安定した生活リズムの中で、毎日の学習を積み重ねることで育つ。つまり学習環境づくりが大切になる。それらを実現させるために、学校と家庭が連携し家庭学習の習慣を定着させ、学校家庭の両面から効果的に基礎学力

を習得させる必要がある。

- (4) 本に親しむ時間を保障し、読書の習慣化を図ったり、地域ボランティアの方々に招いて「読み聞かせ」を行うことで、視覚や聴覚からも本の楽しさを味わわせ、読解力を養う必要がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 児童が興味・関心をもって主体的に学ぶための授業改善をする

児童が主体的に学習に取り組むためには、教師の働きかけにより、どのように問題意識をもたせ、追究意欲を持続させながら解決に至らせるのか、どのような状況で支援が必要なのかを見通しておく必要がある。そこで指導案の形式を児童の意識の流れ（予想される反応・発言）の枠を中央に設け、児童の考えを取り上げて課題設定するなど、児童主体の学習展開となるよう工夫した。

(2) 教師の指導力向上を図る

月に1回の授業研究を行った後に、授業反省会をもち、授業のねらいの沿った指導であったか、手だてや活動は有効であったかなどの点について協議した。

(3) 基礎学力の定着と家庭学習の習慣化を図る

① 基礎学力コンクール

各学年の児童の学力状況に応じた内容で、奇数月に漢字コンクールを、偶数月に計算コンクールを行った。家庭で目標をもって学習に取り組むことができるようあらかじめ出題される問題とテストを行う日時を知らせておき、その日に向けて計画的に学習できるようにした。

② 家庭学習の手引き

基礎学力を向上させるには、家庭学習の習慣を定着させることが欠かせない。家庭での協力が得られるよう「家庭学習の手引き」を全家庭に配付した。手引きには、育てたい児童の姿や家庭学習のポイントを各学年ごとに示した。また、各学年ごとの家庭学習の時間のめやすや、家庭学習の方法例を具体的に示すことで、学校と保護者と児童が同じ目標をもって家庭学習に取り組めるようにした。さらに、家庭学習チェック表を用いて家庭学習開始時刻と学習時間を記入することで、家庭学習の習慣化を啓発した。

(4) 読解力の向上を目指した読書活動の推進をする

毎日決まった時刻に、一斉に本を読み始める全校朝読書を実施し、本に親しむ時間を保障し、習慣化を図った。また、週に一度、地域ボランティアの方々に招いて「読み聞かせ」を行うことで、視覚や聴覚からも本の楽しさを味わわせた。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 児童が興味・関心をもって主体的に学ぶための授業改善をする

教師が予想した児童の反応が出てきたことを課題に設定したり、知的好奇心をゆさぶったりするなど、児童の意識の流れを大切にしながら学習活動を進めたことで、児童主体の授業展開となった。また自力解決が困難な児童がつまづく場面を意識の流れから予想し手だてをあらかじめ考えておくことで、学習意欲が途切れることなくできる喜びや学ぶ楽しさを実感させることができた。

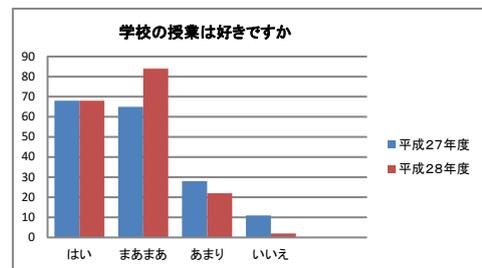
指導過程 本時の学習課題 [] 類に応じた指導 できる喜び、学ぶ楽しさを実感させるための手だて

区分	学習活動	予想される児童の反応	形質	手
8	1 本時の学習課題をつかむ。	人のうちでは、どうなっているでしょう。 骨がある 筋肉がある 血管がある かい部分とやわらかい部分がある 今まで考えたことがなかったな 体のほねときん肉について調べよう		○ 普段のふし ○ 目ざせ ○ 実験を覚悟
10	2 学習課題の予想を立て、調べて予想を確かめる。 (1) 予想を立て発表する。	体の中の骨と筋肉がどこにどれだけあるか予想してかいてみましょう。 骨が腕の中心にある 筋肉が腕全体にある 曲がるところで骨が分かれている		○ 全てのこと ○ 自分 ○ 見分 ○ 線で ○ じさせ ○ 骨 ○ 骨 ○ 骨
27	(2) 調べて予想を確かめる。	体の中の骨と筋肉がどこにどれだけあるか調べましょう。 うで(左・右) ・肘から手首までの骨は二本あった ・腕はひじで曲がる ・手首の近くの骨は細かくてたくさんある あし(左・右) ・ひざから足首までの骨は二本あった ・ひざで曲がる ・足首の近くの骨は細かくてたくさんある 腕(上・下) ・むねは横に何本も骨がある ・背骨は小さい骨が積み重なっている ・腕には大きなハートみたいな骨がある 顔 ・鼻と目は穴が開いている ・あごは動く		★ 評価 ★ 評価

【資料1 児童の意識の流れを示した指導案】

(2) 教師の指導力向上を図る

児童が単元を学習する際に「今、何に興味があるのか」を見取り、その話題を活用すること、事象に対して児童が認識していることにゆさぶりをかけることなど、児童の意識の流れを重視し、授業を進めることは、主体的に活動させることに効果的であった。資料2は、児童アンケートの平成27年度と平成28年度の結果である。「学校の授業は好きですか」の項目については、平成27年度に比べ、伸びを示している。これは授業改善による児童の意欲の向上とともに、教師の指導力が向上したと捉えることができる。



【資料2 児童アンケート】

(3) 基礎学力の定着と家庭学習の習慣化を図る

① 基礎学力コンクール

全学年で児童の実態に合わせて、5・7・9・11月には漢字コンクールを、6・10・12月には計算コンクールを行ってきた。あらかじめ出題される問題を知らせておくことで、どの児童も意欲が向上したようであった。

資料3は11・12月に実施した基礎学力コンクールの結果である。合格点に満たない児童には再テストを行い、合格率を高めた。

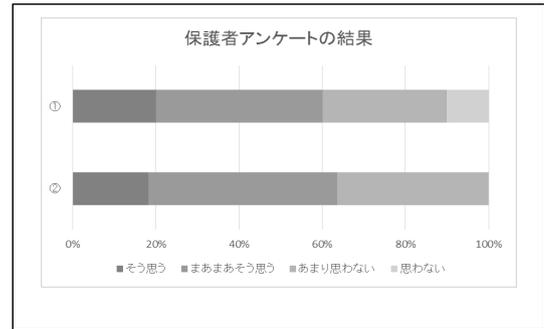
どの学年も80%を超え、着実に基礎学力の定着につながっていると捉えられる。しかし、5年生のように「漢字の合格率は高いものの計算が苦手である」「特定の児童が合格できない」といった実態がある。学年や個々の実態を考慮して指導していくことが今後の課題である。

		祖父江小	漢字	計算
合格率 (%)	1年		80.6	87.1
	2年		83.2	86.5
	3年		85.7	91.3
	4年		88.9	96.3
	5年		91.4	80.7
	6年		84.3	84.3

【資料3 児童アンケート】

② 家庭学習の手引き

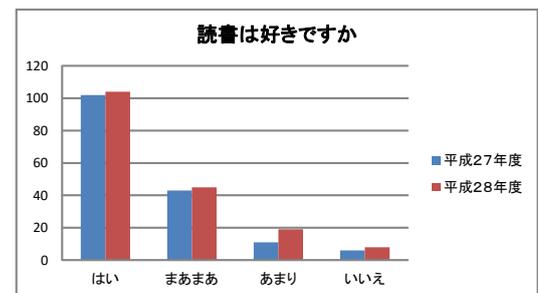
家庭学習の習慣化については、9月の保護者へのアンケート結果（資料4）から、「①毎日同じ時刻に机に向かい学習していますか」に対し6割近くの家庭が「そう思う、まあまあそう思う」と答えた。また「②自ら学び自ら考えようとする姿勢が育っているか」についてのそれは7割弱であった。「家庭学習チェック表のおかげで、勉強時間を意識して取り組む習慣が以前よりはついてきたと思っている」「家庭学習で何をどのくらい取り組ませるとよいのかがよく分かった」との声も聞かれた。しかし、各家庭の学習チェック表を点検していると、まだまだ家庭学習の習慣の定着が図れているとは言い難い状況があり、繰り返し児童及び家庭への啓発を続けていきたい。



【資料4 保護者アンケート】

（4） 読解力の向上を目指した読書活動を推進する

朝読書の開始時刻になると教室に静寂が訪れ、児童が本の世界にたっぷりと浸ることができた。また、読み聞かせでは、本の内容から質問や感想を自主的にするようになってきた。資料5は平成27年度と平成28年度の結果である。「読書は好きですか」の項目については、若干低くなったが、4段階評価で平均が3.4と高い数値を維持している。



【資料5 児童アンケート】

これは話を聞きながら内容を想像する楽しさと、読むことの楽しさの相乗効果の表れと捉えることができ、継続することで読解力を養うことにつながった。

4. 今後の課題

（1） 児童が興味・関心をもって主体的に学ぶための授業改善をする

教師が予想した児童の反応が出てきたことを課題に設定したり、知的好奇心をゆさぶったりするなど、児童の意識の流れを大切にしながら学習活動を進めたことで、児童主体の授業展開に改善できた。具体物の利用は、興味をひき関心を高める上で効果的ではあるが、教師の意図していない方向へ意識が向いてしまうこともある。意識の流れや使用効果を吟味して利用していきたい。

（2） 教師の指導力向上を図る

学習意欲を高めることはできたものの、基礎学力の定着については、再テストや家庭学習などの学力補充に頼ることも多い。基礎学力の定着は、本来日々の学習活動の中で目指すべきものである。今後は習得した知識の活用を図るなど、授業改善を通して指導力を向上させていきたい。

(3) 基礎学力の定着と家庭学習の習慣化を図る

本実践では、各月の基礎・基本の定着度の把握を基礎学力コンクールで確認し、学力補充に努めてきた。多くの児童がテスト当日に合わせて家庭学習に取り組むなど家庭の協力があり、児童の学習意欲も向上した。文を構成する主語と述語との照応関係についても、学習の振り返りやまとめを書く活動を充実させることで一定の成果があった。

しかし、学校アンケートで今年度初めて調査した「ゲームやスマートフォンを1日でどのくらいしますか」の項目では、学年が上がるほど時間が長くなることが分かった。際限なくゲームをしたり、インターネットやスマートフォンを使用したりすることが推察される。メディアに振り回されるのではなく、家族や児童自身がメディアをコントロールできるように啓発するとともに、学習の土台となる基本的生活習慣を身に付けさせ、安定した生活リズムのなかで、毎日の学習を積み重ねることができるよう、家庭と学校とが連携して児童を育てていきたい。

(4) 読解力の向上を目指した読書活動の推進をする

朝読書や読み聞かせの活動を通して、多くの児童が読書を楽しむようになった。図書館や学級文庫の本を読んでいるが、読解力を養うためには、発達段階に合った物語や説明の本などを数多く揃える必要がある。図書館司書と連携したり、市立図書館の配本サービス事業を利用したりして環境を整えていきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	稲沢市立祖父江中学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成27年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語と理科は全国平均を上回っているが、数学は下回っている状況であった。国語においては「読む能力」が特に低いという状況を捉えることができた。同調査の生徒質問紙からは、「テレビやビデオ・DVDを見る時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール・インターネットをする時間」は全国平均に比べて少なく、「学校の授業以外に勉強する時間」は普段（月～金曜日）、土・日曜日とも全国平均より多いという状況が捉えられた。

また、平成27年度の教研式標準学力検査の結果を全国比と比較すると、どの教科においても「関心・意欲・態度」は高いが、他の観点では低いものが多いという現状が捉えられた。

以上のことから、以下の課題が明らかになった。

- (1) 「意欲的に学習に取り組んでいるが、知識・技能が十分に定着していない」という現状は、授業において明確な目標を与えられていないことが一つの要因であると考えられる。「めざす生徒像」をはっきりさせて、授業改善に取り組む必要がある。
- (2) 授業で習得した知識・技能がどれだけ定着しているかを確認する場がないため、生徒に自身の学びを実感させることができていないと考えられる。学習環境を整えた上で、生徒たちが「わかった」「できた」と感じることのできる場を設定する必要がある。
- (3) 本校は経験年数の少ない教員が多く、それが十分な教科指導につながっていない現状がある。校内研修などを通して、教員の授業力の向上させる必要がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎・基本の定着に向けて（指導案の工夫）

授業研究における指導案の形式は、稲沢市の指導案例を基にして、本校の研究のねらいや授業の特徴が明確になるように以下のような工夫をした。

- ① 「単元について」

めざす生徒の姿をはっきりさせて授業を行えるように、「生徒の現状」を分析し「つけさせたい力」を決め、この2点を明記した。

② 「本時の目標と評価」

目標を達成したときの生徒の具体的な姿を想定し、それを評価基準として指導案に示した。

③ 「『〇〇する力』を身につけさせるための手だて」

授業者のねらいを基に、本時の授業で身につけさせたい力を示し、それを達成するための手だてを各教科部会で検討し、示した。

④ 「指導過程上の手だて」

③で示した手だてを扱う場面を波線で示し、この場面の教師の発問や子どもたちの様子を中心に研究協議会を行った。

⑤ 「板書計画」

学習のめあて（本時の目標）とまとめ(振り返りに必要な内容)については必ず板書に残すように定め、授業の流れが確認できるように板書計画を示した。

(2) 充実した学習環境づくり

① 祖中三箇条の呼びかけ

学力向上の基本は落ち着いた学習習慣であると考え、授業の基本となる「祖中三箇条」として、「返事・姿勢・発表」という言葉を年度初めの学年集会などで生徒全体に呼びかけた。また、学級用の掲示物を作成し、生徒の目に常に触れるように、全ての学級に掲示した。そして、授業や学級の時間などで折に触れて声をかけていき、生徒が常に意識できるように心掛けた。

② 事前学習会の実施

朝や授業後の時間を使って、定期テストに向けての事前学習会を実施した。学習室や多目的教室を利用し、参加を強制せず、希望のある生徒が自由に参加できるように実施した。担当教員はテストの内容だけでなく、基礎段階の内容の疑問や質問にも丁寧に答えるように心掛けた。

(3) 基礎学力コンクールの実施

基礎学力の定着を図ることを目的とし、国語と数学で全学年全学級において基礎的な学力テストを繰り返し実施した。毎朝10分間行っている朝学習の時間を利用し、10月から月1回のペースで以下の様なスケジュールで計画的に学習に取り組ませた。

日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
内容	勉強(国語)	勉強(数学)	勉強(国語)	テスト(国語) 余った時間で 勉強(数学)	テスト(数学)

国語では言語活動の基盤となる「語彙力」を、数学では中学校で行う学習活動の基盤となる「計算力」を基礎学力と定めて問題を作成した。

(4) 小・中学校合同の研修会の実施

教員の授業力の向上を図るため、岐阜聖徳学園大学の玉置崇先生を講師として招き、協力校の小学校と合同で研修会を実施した。「学力定着」をテーマとして、授業改善のための教師の手だてについて、指導していただいた。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎基本の定着に向けて（指導案の工夫）

指導案に「生徒の現状」と「つけさせたい力」を明記したことにより、各教科で「思考力・判断力・表現力の基盤となる知識・技能」を検討することにつながった。その結果、各実践の目標が具体的となり、「めざす生徒の姿」をより明確にすることができた。さらに、達成したときの生徒の具体的な姿を評価の基準として設定することで、より明確で具体的な支援を生徒に対して行うことができた。また、「めあての提示」や「振り返りとまとめ」を意識して、構造的な授業の展開を計画したことで、求める知識・技能を習得するために、どのような活動でどんな力を養えばよいかという「習得のプロセス」を明確にすることができた。

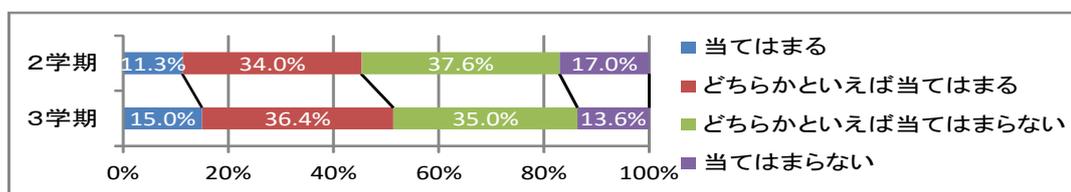
今年度の教研式標準学力検査の結果を比較すると、課題としていた国語の「読む能力」の観点、数学の全観点で数値が伸びており、学力が向上していることが捉えられた。

教科	観点	H27		H28
国語	読む能力	94	→	99
数学	関心・意欲・態度	108	→	109
	数学的な見方や考え方	106	→	112
	数学的な技能	104	→	109
	数量や図形などについての知識・理解	106	→	107

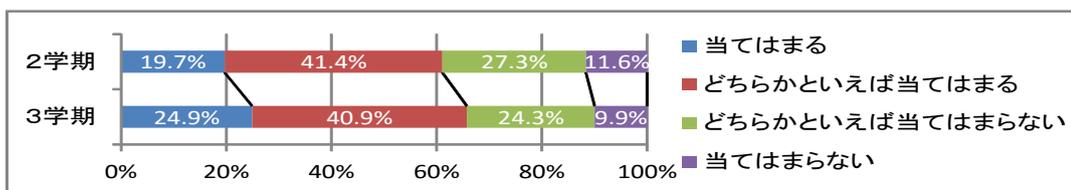
【教研式標準学力検査の結果（平成27年度1年生と平成28年度2年生との比較）】

また、生徒の学習状況や国語と数学の授業に対する意識を確かめるために、学期ごとに全校を対象としたアンケート調査を行った。その結果を見ると、国語や数学の授業についての項目で大きな伸びを示しており、本校の取組の成果であるといえる。

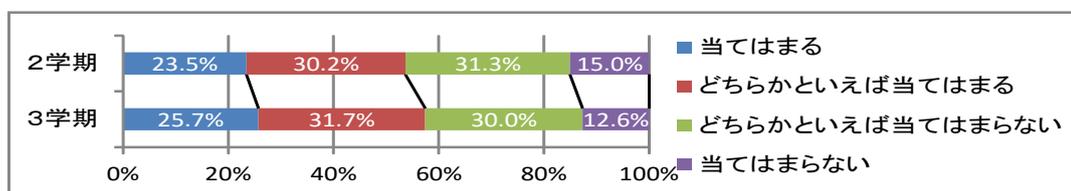
〈アンケート調査の結果〉



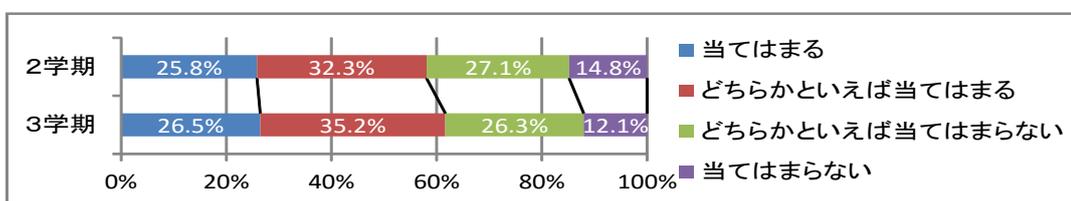
【国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている】



【国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりごとに内容を理解しながら読んでいる】



【数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える】



【数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている】

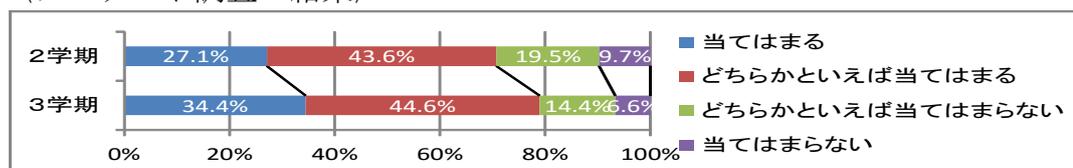
(2) 充実した学習環境づくり

年度の初めから呼びかけた「祖中三箇条」によって、規律ある学習姿勢を喚起することができた。多くの授業で「返事・姿勢・発表」の3つのキーワードを意識した生徒たちの行動が見られ、この一年で定着しつつあるといえる。

「事前学習会」については、1学期の参加者は数名であったが定期テストごとに参加者が増え、大勢ではないものの一生懸命に取り組む生徒の姿を見ることができた。基礎的な学習内容を質問する生徒が多く、家庭学習をどのようにすればよいか分からない生徒や、学習に対して不安を抱える生徒を支援することができた。また、3年生では、過去の入試で出題された問題について質問をする姿もあり、発展的な学習のために学習会を利用する生徒もいた。

アンケート調査についても、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」という項目で大きな伸びを示した。

〈アンケート調査の結果〉



【先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれる】

(3) 基礎学力コンクールの実施

2学期中旬以降で実践した「基礎学力コンクール」については、全3回実施した。テスト結果を分析して正答率の低い問題を授業で解説したり、復習として再び問題に取り組みせたりするなど、その後の指導につなげていった。

次の資料は2年生の結果である。国語と数学どちらにおいても平均点が上がっており、基礎・基本の定着が伺える。また、満点を取ることができた生徒の数も大きく伸びており、「できた」という達成感をより多くの生徒に味わわせることができたと考えられる。

〈2年生の結果〉

【国語】	第2回	第3回
平均点	5.52	5.65
満点の人数	29	35

※ 第1回は形式が異なるため除外

【数学】	第1回	第2回	第3回
平均点	11.25	11.28	11.68
満点の人数	39	45	64

(4) 小・中学校合同の研修会の実施

冬休みに行った研修会では、演習を交えながら指導技術について指導していただいた。「授業の原則」と「家庭学習の在り方」を中心に、子どもたちへの具体的な支援の方法についての助言をいただくことができた。授業において生徒が「できる」ようになるための手だてだけでなく、「できる」ようになったことをその後も維持する、いわば定着させるための手だてについて様々な提案をいただいた。今後の実践に向け、教員の意識や授業力の向上につながったと考えられる。

4. 今後の課題

工夫した指導案を作成しようとする中で、本校の教員の「授業力」は着実に向上している。しかし、アンケート調査の「授業の内容はよく分かる」という項目では、明確な変化を捉えることができなかった。これは「職員の授業力」や「目標達成にむけた具体的な手だての検討」がいまだ十分でないことを示している。到達目標が定まり「習得のプロセス」を明確にしても、身につけたい力をつけさせるための具体的な手だてが不明瞭になってしまっただけでは知識の定着は望めない。この課題に取り組むには、各教科でチームとなって教え合ったり、情報を共有したりすることが必要であると感じた。その上で、研究授業の数を増やし、各教科で話し合ったり、教員間で多くの実践を参観し合ったりすることで、指導技術を高めていきたい。

また、授業展開の計画が不十分で「振り返りとまとめ」の時間を実践の中でしっかりと確保するということが徹底できなかったことも大きな反省点である。これは知識技能を定着させるために大変重要な過程である。普段の授業の中で、この時間を確保しようとする意識を十分に高めていきたい。

「学習環境づくり」や「基礎学力コンクールの実施」については、一年間を見通し

た計画を立てられなかったり、実際にその計画を予定通りに行うことができなかつたりしたために不十分な成果となってしまった。次年度は、子どもたち一人一人の向上をめざすため、明確な目標と意図のはっきりした年間計画を作成する必要がある。そして、年間を通して全体で一つの目標に向かって力を注げるような体制をつくっていききたい。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 28 年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	稲沢市立長岡小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成 27 年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、算数B以外は全国平均を下回っていた。その中でも特に国語が大きく下回っている。国語Aでは表現の工夫や漢字の正答率が低く、言語活動や漢字の習得に課題があり、国語Bでは新聞の紙面の作り方、物語のあらすじをまとめることに課題があった。算数Aでは図形についての正答率が低く、算数Bでは日常的な事象の中に概数や概算を用いたり図形の性質を活用したりするところに課題が残った。また質問紙の結果を見ると学習学習の時間が短く、テレビやゲームの時間が長い傾向も見られる。これまでの、過去3年間の調査結果を比較すると、年度によってばらつきが見られる。単学級という点で、学年毎の担任による取組の差が結果に表れていることも考えられる。

平成 27 年度全国標準学力検査の結果ではどの学年も全国平均をやや下回っている。特にどの学年も国語の観点『読む』や算数の観点『数学的な考え方』が低い傾向にある。

このことから、平成 28 年度は、基礎学力の習得及び学習内容定着に向けた家庭学習の取組を重点課題とし、学校として共通認識のもと学習システムや学習環境を整備することとした。

2. 協力校としての取組状況

平成 28 年度は以下の改善に取り組むことで、児童の学力向上を図っていく。

(1) 授業形態の共通化

授業の見通しをもたせるために、課題学習のめあてを「め」として板書に示すようにする。また、本時のまとめについても「ま」としてまとめた板書をする。そのことで、児童には視覚的にも1時間の学習内容の流れの明確化を図るようにした。学期途中からの「め」「ま」であったため形式の統一には無理があったが、「めあて」や「まとめ」を意識した授業展開を行うことができた。

(2) 振り返りの学習の設定

学習の終わりに、振り返りの時間を設定し、自分のことばで分かったことを書

くようにした。書くという作業を通して、分かったことを自分の中できちんと整理する活動を重視し、同時に授業者の授業の評価にも活用し、次時の授業に生かしていくようにした。授業の進み具合によって十分な時間を確保することが難しいこともあって、すべての授業で振り返りをするのは困難であったが、重点単元を設定することで、児童に振り返りを意識するように試みた。

(3) 学習環境の統一

教室に「声のものさし」「ハンドサイン」「発表の仕方の話形」「発表の聞き方」を表示した掲示物を貼り、学校全体で統一して学習環境を整えた。低学年においては授業のなかで常に意識するように指導し、習慣化を試みた。

(4) 学習の手引きの作成

4月当初、現職教育で各学年の発達段階に沿った適切な学習時間や学習の量、学習内容について検討した。4月下旬のPTA総会後に実施する学年懇談会の資料に、家庭学習についての手引きを掲載し、懇談会で説明を行い協力を求めた。学校全体で家庭学習の内容など統一するところまではできていないが、学年ごとの適切な学習時間を設定し、学年ごとの家庭学習の量の意識化を図ってきた。

(5) テストを活用して定着の強化

テストを活用して定着の度合いを把握し、基礎的・基本的な内容で理解が不十分な内容に対して繰り返しの学習による定着を図った。特に学期末のまとめのテストを活用して、基礎的な内容の定着ができるように重点的に対応した。

(6) 朝学習の充実

月・水・金の8時15分～8時25分の10分間を朝学習の時間として設定し、漢字練習や計算練習等の基礎的基本的な学習の定着を図った。基礎的基本的な内容に絞ったプリントを活用し、計画的に進めた。

(7) 朝読書の充実

火・木の8時15分～8時25分の10分間を朝読書の時間として設定し、学校図書館や学級文庫等の本を活用して、読書に親しませてきた。学習の土台となる文字や文章に対する抵抗を少なくし、語彙力をつけるようにしてきた。

(8) 現職教育による「読解力・思考力・表現力」の育成の取組

言語活動の工夫を通して、「読解力・思考力・表現力」の育成に力を入れてきた。特に、年間を通して計画的に「書く」という手立てにより、読解力や表現力の育成に取り組んできた。

(9) 研究実施経過

月	協力校の取組	備考
4	掲示物の統一 現職委員会	<ul style="list-style-type: none"> 教室環境の整備と統一 昨年度のCRT結果の再確認と今年度の方 向性の確認
5	学年懇談会の活用 授業研究・基礎学力定着の取組	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習について保護者への説明と協力 依頼

6	授業研究・基礎学力定着の取組	・ 職員の授業技術向上
7	学校評価分析	・ 1学期の学習の定着を図る
8	各職員の研修	・ 取組の反省と2学期への取組の確認
9	研修報告・授業研究	・ 研修内容の共有化
	全国学力・学習状況調査の結果分析	・ 職員の授業技術向上
10	授業研究・基礎学力定着の取組	・ 職員の授業技術向上
11	授業研究・基礎学力定着の取組	・ 2学期の学習の定着
12	基礎学力定着の取組・各職員の研修	・ 結果を踏まえ、指導の見直し
1	基礎学力定着の取組・研修報告	・ アクセスシートの活用
	CRT検査	・ 学年の学習の定着測定
2	CRT結果分析	・ 次年度の方向の決定
3	補充学習	・ アクセスシートの活用
	次年度の方針検討	・ 学習システム・学習環境の共通理解

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 学校評価アンケート（4：大変よく当てはまる ～ 1：まったく当てはまらないの4段階評価）において7月と12月を比べた結果では、「お子さんは授業で学んだことを理解している。」(2.89 → 2.99)とわずかなではあるが増加傾向を示した。これは授業の板書に「めあて」「まとめ」「振り返り」で1時間の授業がまとめられることが多くなり、1時間の授業の取組に変化が見られるようになってきたからである。職員の中には単元計画表を掲示し、児童の意識を高めようと努力する姿が見られるようになった。また、学習環境を統一したことで、低学年においても習慣化が図られている。

(2) 学校評価アンケートにおいて7月と12月を比べた結果では、「お子さんが家庭で学習するのに、適切な課題・宿題(量や質)が出されている。」(2.92 → 3.01)とわずかなではあるが増加傾向を示した。

これは、学習の手引きを作成し、担任自身が学年懇談会で説明したことで家庭学習の量を意識化して取り組むようにできた成果である。

(3) 学期ごとのまとめテストの結果では、特に漢字の学習において向上が見られた。(下表参照)

まとめテスト(漢字)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1学期		85.1	86.5	60.1	74	91.4
2学期	84.8	88.7	85.2	63	82.4	91.6

これは、朝学習が充実し、テストを活用して繰り返しの学習による学習の定着を図った成果である。

(4) 全国標準学力検査の結果では「書く」と「読む」が全国比に近づけることができた。(下表参照)

平成28年度 国語の「書く」「読む」の結果

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
書くこと	97	106	104	100	102	104
読むこと	105	114	110	94	108	106

これは朝読書によって読書に親しませたり、現職教育において言語活動の工夫を通して、読解力や表現力の育成に取り組んだりした成果である。

- (5) 全国標準学力検査の結果では前年度と比較すると、児童の国語と算数の興味が上がっている。(下表参照)

国語の「興味」の前年度との比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
平成27年度		93	127	117	103	110
平成28年度	106	105	116	126	117	129

算数の「興味」の前年度との比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
平成27年度		90	114	117	102	112
平成28年度	106	107	116	119	109	125

これは、担任の授業改善の取組によって授業の内容が児童にとってわかりやすいものとなって、児童の意欲や興味につながったからである。

4. 今後の課題

- ・ ノートや漢字ノートの指導など、基本的な形式について共通化を図っていくと共に、学年ギャップが生じることのないように段階的な指導の在り方について職員の意識統一を図っていくこと。
- ・ 単学級のため、担任経験の差が学力定着に影響をおよぼしやすい。学校全体として情報交換や研修の場を多く設定し、互いの力量向上に努めていくこと。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	稲沢市立領内小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の平成27年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語Aに関しては文の中における主語を捉えることや、新聞のコラムを読んで表現の工夫を捉えることが、全国と比べてやや低い正答率になっていた。国語Bについては、文章と図とを関係付けて、自分の考えを書くこと、登場人物の行動を基にして、場面の移り変わりを捉えることは、全国と比べてやや低い正答率になっている。

また、算数が全国平均を下回っており、算数Aでは除数が整数である場合の分数の除法の計算や、日常生活の中で必要となる時刻を求めることは、比較的できていた。しかし、「 $8.9 - 0.78$ 」の計算結果のおよその大きさを捉えること、加法における計算の確かめの方法の理解、分度器を用いて、 180° よりも大きい角の大きさを求めること、円の中心と円周上の二点を頂点とする三角形の角の大きさを求めることなどは、全国と比べて低い正答率になっている。全体的にもう少し努力を要する状況である。算数Bでは、単位量当たりの大きさを言い、目的に応じた買い物の仕方を選択し、代金を求めることや、示された情報から規準量を求める場面と捉え、比較量と割合から規準量を求める事などは、よくできていた。

しかし、平行四辺形の作図方法に用いられる図形の性質の理解や、示された二組の道のりが等しくなる根拠として図形を見だし、その図形の性質を言葉と記号を用いて記述することや、正三角形の性質を基に、示された周の長さから辺の長さが等しくなる位置を求めることなどは、全国と比べて低い正答率であった。

そして、課題としては次の2点があげられた。

- ・ 学年により児童の学力格差が見られたため、当該学年で定着に不十分な学習内容や領域を明確にするとともに、基礎学力の確実な定着に向け、指導のスタンダード化が必要である。
- ・ 学校評価アンケートの結果と全国標準学力検査の結果との間には、格差が見られる。つまり、学習意欲と確かな学力が結びついていないという状況があるため、主体的な学習により、活用型学力と書いてまとめる学力の育成を図る授業改善が求められる。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎・基本の定着に向けて

本年度から定めた5つの学習スローガン①用具の準備、チャイム着席②机の上はすっきり整頓③はっきり大きな声で「はい」「です」「ます」④背すじを伸ばして書く、話す人の目を見て聞く⑤あいさつは心をこめてのうち、特に①用具の準備、チャイム着席に力を入れて取り組んだ。また、本校は朝の火～金曜日の始業前に読書活動に取り組んでいたが、そのうちの2日間は国語、算数の学習の時間として取り組むことにした。また、9月、1月の長期休業後に「がんばり大会」復習テストを実施している。これは1学期、2学期の学習した内容を復習させるためのテストで、既習事項の定着を確認するためのものである。さらに3～6年生においては、1週間のうちすべての算数の授業と国語の2時間はTTの授業を行っている。

(2) 主体的な学びを促す授業

課題を把握し、改善するために、全国平均に比べ数値の低かった学習状況調査について調べ、その対策を考えることにした。その中で特に数値が低かった項目は、「家で、学校の予習をしていますか」、「国語の授業で意見を発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか」、「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」、「算数の授業で問題の解き方が分かるようにノートに書いていますか」等であった。そこで、これらの項目について、どうすれば改善できるのか、方策、手立て等を話し合い、実践していった。

(3) 教師の指導力向上

全員が授業研究を行い、授業反省会をもち、ねらいに沿った授業であったか、手立てが適切であったかなど協議を行った。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 基礎・基本の定着に向けて

児童は授業が終わるとすぐに次の授業の準備をする習慣が身に付いてきており、45分の授業時間を有効に使うことができるようになった。

(2) 主体的な学びを促す授業

本校の児童は、どちらかという人前で発表することに消極的な児童が多い。そこで、算数の授業で発表する前に、ペア学習を取り入れ、まずペアに対して発表する練習をさせた。その際、話し方マニュアルを提示し、自分の考えを聞き手に分かりやすく伝える方法を指導した。また、ペア学習において友達の考えを聞いたり友達のノートを見たりする中で、分かりやすいと思ったところや、まねをしたいと思ったところは、青鉛筆を使って自分の考えた文などに書き足させ、友達の良いところを取り入れるようにさせた。ワークシートには、発表の手助けとなるようポイントとなる言葉を書くスペースを設けた。そして、ノートはこまめに点検し、朱書きによる助言をするようにした。

この結果、「家で、学校の予習をしていますか」の質問では4月は25%しか予習していなかったが、12月には37%の児童が予習を行うようになった。この値は全

国平均にはまだまだ及ばないが、少しではあるが改善されているように見受けられる。同様に「国語の授業で意見を発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか」という質問では、工夫している児童の割合は4月には46%しかいなかったが、12月には66%の児童が工夫していると答えた。また「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」という質問は、4月には69%だったが、12月には79%の児童が「はい」と答えている。また「算数の授業で問題の解き方が分かるようにノートに書いていますか」という問いでも、「はい」と答えた児童が67%から79%に増えている。授業に対し前向きに捉える児童が増えてきたことがわかる。

学習状況調査 回答集計

家で、学校の授業の予習をしていますか。				
	1	2	3	4
4月	10.7	14.3	35.7	39.3
12月	5.5	31.5	48.1	19.8

国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか。				
	1	2	3	4
4月	16.1	30.4	39.3	14.3
12月	18.5	48.1	25.9	7.4

算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。				
	1	2	3	4
4月	32.1	37.5	23.2	7.1
12月	33.3	46.3	18.5	1.9

算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートを書いていますか。				
	1	2	3	4
4月	33.9	33.9	21.4	10.7
12月	37.0	42.6	14.8	5.5

1 している 2 どちらかといえば、している 3 あまりしていない 4 全くしていない

(3) 教師の指導力向上

授業研究ではワークショップ形式での研究協議会を短時間で行うことで経験年数の少ない教師へのアドバイスを行ったり、他校の研究授業や学力向上に関する指導の研究、先進校の公開授業に参加したり、基礎・基本の大切さや主体的に授業に取り組む姿勢を学んだ。また、外部講師による研修会も大変参考になるものであった。特に、復唱法は話し合い活動を行ううえで参考になった。

4. 今後の課題

学習状況調査では、よい傾向が見られることが明確になった。今後は、CRTの結果をもとに具体的な学力向上の手立てを考えていきたい。また、着実に成果を上げるため、板書の効果的な利用法、家庭学習の取り組み方などこれからさらに研究を重ねていきたい。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	知立市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

知立市学校教育スタンダードとして、「活用力（言語活動）」「粘り強さ（最後まで頑張る）」「生活・学習習慣」の3つを重点項目とし、市内全教員が大事にしたい教育的内容を共有し、学習指導・生活指導を行っていく。

2. 研究課題への取組状況

平成25年度に、知立市教育委員会より市内10校の教務主任が委嘱を受けて学力向上研究推進委員会を立ち上げ、児童生徒の学力の向上を目指し研究を進めてきた。研究初年度の平成25年度に、学校や家庭で大事にしたい教育的内容を「知立市学校教育スタンダード」としてまとめ、それ以後その普及に努めている。平成28年度からは、それをさらに充実していく方向で、本事業の推進地区として知立市が、市内10校の協力校とともに実践研究に取り組みはじめた。初年度である本年度は、以下の内容に取り組んだ。

(1) これまでの全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（CRT・NRT）の結果を分析して各学校の課題を把握し、学力向上へ向けた授業改善を図る。

まず、協力校ごとに全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（CRT・NRT）の結果から課題を把握し、知立市学校教育スタンダード「かきつばた」（別紙資料1）の5つの項目から各校の重点項目を設定した。そして、重点項目における教師の力量を高めるために、外部の講師を招聘し、研修や実践研究を進めた。

また、全国学力・学習状況調査の問題を知立市内すべての教師が実際に解くことで、どのような力が求められているのか、どのような学習が必要なのかを確認し、教師の授業改善に取り入れた。

(2) 児童生徒の「活用力（言語活動）」を高めるために、教師の授業改善に視点を置いた知立市学校教育スタンダード「かきつばた」を基に授業を見直し、教師の授業力向上を図る。

平成27年度には、市全体を挙げて「か」「つ」「ば」の3項目に重点を置き授業実践を行ってきた。今年度は、学力調査等から分析し、ほとんどの学校で「書く」ことに課題を抱え

ていることが分かり、「き」に重点を置き実践を進めた。

「書く」スキルを習得させるためには、まず教師や友達の話をしっかり「聞く」こと、そして考えを整理して「話す」ことが大切である。そこで「聞き方・話し方」について子どもたちに意識させるための掲示物を各教室に掲示し、意識させた。また、ペアトークやグループトークを授業に取り入れたり、短学活の時間にフリートークの時間を取り入れたりした。フリートークでは、与えられたテーマについて話したり、相手の話をうなずきながら聞いて質問や感想を言ったりすることで「聞く」「話す」力を付けるようにした。また、話す内容を書き留めるようにすることで「書く」力を付けるようにした。さらに、板書計画を立案して授業に臨み、授業のゴールイメージをもって授業を進めると同時に、子どもが学習を整理して書くことの支援の一つとした。その他、「書く」ことに重点を置いた具体的な実践として、「百マス作文」に取り組んだり、これを基に学校独自に作成した「書けマス作文」（百マス以上、時間を計測して書かせる）に取り組んだりした。また、作文学習にグループ活動を行い、分からないことやより詳しく知りたいことをメモし、まとまりある文章に仕上げていくという学習方法を取り入れた。

さらに、だれもが「わかる」「できる」授業（知立市学校教育スタンダード活用力（言語活動）編 かきつばたの「た」の項目）をめざし、大型テレビの活用や、思考ツールの活用により、課題を明確にしたり、考えを整理したりして、思考の可視化をめざした。また、子どもたちの理解を深められるよう、自作の教材や教具を作成した。

- (3) 子どもたちの家庭学習の取組方や家庭への啓発方法を見直し、家庭学習の一層の充実を図る。

まず、学級活動等で子どもたちに粘り強く学習に取り組むことの大切さに気づかせたり、自学ノートによる家庭学習の習慣化を図ったりした。さらに、長期休業前に教師が作成した国語・算数の振り返りテストを行い、苦手なところを個人懇談等で保護者に示し、長期休業中の家庭学習の参考にした。家庭への啓発では、「家庭学習のススメ」（別紙資料2）の内容を、発達段階に応じたポイントを示すように改善、充実させた。

本実践研究の円滑な実施のために、市の学力向上研究推進委員会を①授業推進班、②学習定着啓発班、③調査・報告班の3つの作業班に分け、作業班での討議・活動を中心として研究を進めた。

① 授業推進班

授業実践に役立つ資料を市内の教員が自由に閲覧し活用しやすいように、市内イントラネット上に「知立市学力向上実践ライブラリー」を開設し、書庫内の整備・充実に取り組んだ。資料をアップデートしやすいように、市教育委員会が書庫内のフォルダのシステム管理を行っている。

「かきつばた」の5つの項目で、課題として分析された内容をもとに、各校で重点項目を設定して講師を招聘して授業改善を推進した実践内容をまとめた。また、各校の授業改善の実践を基に学力学習充実プラン「授業アドバイスシート」（小学校）を作成した。

② 学習定着啓発班

市内教員に対し各種研修を企画実施した。7月28日には、市教委と連携しながら夏季

研修講座に、佐藤洋一愛知教育大学教職大学院教授を講師に迎え研修会を行った。「これから求められる“資質・能力”と確かな学力の定着・向上」という演題で講義をしていただき、学力向上・定着について必要なことについて研修した。12月26日には4年目までの若手教員を対象に、知立市学校教育スタンダード「かきつばた」（別紙資料1）について理解を深めるために研修会を開催した。45人の参加者が7つのグループに分かれ、普段の授業の悩みや、「かきつばた」の視点に立った各校の授業実践について意見交換を行った。その際、教務主任を各グループにアドバイザーとして配置し、話し合いがより深まるようにした。グループ協議の後、講師の前田勝洋先生より、個を伸ばす授業のあり方について講義を受けた。

冬季休業中には、全教員を対象に全国学力・学習状況調査の問題を解くという研修を行い、自由記述式のアンケートを取った。アンケート調査から出てきた感想や授業の改善点などをまとめ、推進委員会が発行する「かきつばた通信」に研修会で学んだ内容や授業の提案とともに掲載し、全教員への共有化を図っていく。2月15日には教務主任対象に「家庭学習について」佐藤洋一愛知教育大学教職大学院教授を講師に迎え研修会を行った。この研修会を受け、来年度に向けて、新しく充実させた「家庭学習のススメ」活用方法と、推進地区として取り組む方向性についてご示唆をいただいた。

③ 調査・報告班

本年度、授業実践にあたっては、「かきつばた」の視点をさらに意識した指導案を全協力校で作成し、授業実践に取り組んできた。そこから、子どもたちの話し合い・学び合いの協働学習がさらに活発になるような教具の必要性を感じ、「学習ボード」という教具を作成した。学習ボードとは、水性ペンで書ける白いボードの上に透明シートを取り付け、写真資料や学習プリントを挟み込んで、水性ペンで書き込みながらグループで考えをまとめたり、発表で活用できたりするものである。



【学習ボードを活用しての学び合い】

子どもの学習への意識調査を小学校4・5年生と中学校1・2年生に実施、来年度も同じ質問で継続して実施して経年変化を調べ、その結果を教員の授業実践に生かしていく。

3. 実践研究の成果の把握・検証

全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（CRT・NRT）の結果から各学校の課題を把握し、知立市学校教育スタンダード「かきつばた」の5つの項目から各校の重点項目を設定し研究を

質問項目	平成27年度		平成28年度	
	児童	教師	児童	教師
授業が楽しい・授業が分かりやすい	73.2%	77.3%	80.9%	85.7%
先生や友達の話をきちんと聞いている	83.8%	54.5%	88.5%	83.4%
授業中、意見や考えを進んで発表している	63.3%	57.1%	62.8%	66.7%
少人数指導で学習の効果が上がっている	64.9%	82.4%	78.2%	88.2%
家庭学習の習慣が身についている	83.5%	59.0%	83.7%	77.3%

【表1 協力校の学校評価アンケート結果】

進めたことで、学習への取組状況や理解力が向上した。重点項目に対し、各校独自に思考ツールを使用しての学習やリライト教材を使用した授業、音声計算や百マス作文、書けマス作文、全校九九強調週間など、課題克服のための取組が実施できた。この結果、ある協力校では学校評価アンケートにおいて、前年度と比べて表1のような変化が見られた。

「書く」ことに対しては、小学2年の作文授業後のアンケートに「上手に文章が書ける」と答えた児童が43%から60%に上昇した。これらの取組が確かな学力の向上にどうつながったかは、経年アンケート調査結果を見て判断していきたい。

また、各学校の課題に応じて外部講師を招いて授業研究を進めることで、全教員の授業力向上のための意識化につながった。授業実践にあたっては、「かきつばた」を意図的に組み入れた指導案を作成するようにし、講師からのアドバイスや教員間での授業の練り合い、先行授業の実施などにより、教師の授業力の向上が図られた。

家庭学習については、「家庭学習のススメ」の啓発をPTA総会など保護者の集まる機会や学校だより等でやってきた。家庭学習への取組状況は、全国学力・学習状況調査のアンケート調査では依然全国平均を下回っているが、前年度よりは少しよくなっている。啓発する中で「家庭学習のススメ」についての内容について不十分な点も見えてきた。

4. 今後の課題

今年度の成果をもとに、協力校の実践報告から今後の課題として次の2点が挙げられる。

- ・「聞く・話す・書く」についてさらに力を付けさせるため、教師の力量を向上させる
- ・有効な家庭学習のあり方を、教師と家庭ともにより意識させる

若手教員対象の研修会では、講師の前田勝洋先生より、話し方（話し型）の工夫と全員参加型の授業をつくるだけで、子どもたちの学力は大きく伸びるというアドバイスをいただいた。また、他校の講師の先生からも「間違いがこわくない学級・学校づくり」や「みんなでつくりあげる学級づくり」を進めていくことで、授業での活発な発言につながっていくとアドバイスをいただいた。今年度の教師の意識化を図る取組から、児童生徒の「聞く・話す・書く」ことへの意欲は高まってきている。今後はその力を十分に伸ばすための手立てを明確にしながさらには他との関わり方や全員参加型の授業のあり方の工夫に取り組んでいく必要がある。そのためには、引き続き教師の授業力向上のための研修の充実、さらには「知立市学力向上実践ライブラリー」に参考となる実践例を集め、教師が積極的に授業改善を図ることができるよう、市全体で児童生徒の学力の向上に取り組んでいく。

また、全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（CRT・NRT）、アンケート調査の経年変化を分析することで、教師の「かきつばた」を意識した授業づくりや諸々の実践についての成果を把握していかなければならない。と同時に、子どもの学びへの意識調査から、教師の授業実践を反省するとともに、家庭との連携も充実を図っていく必要がある。家庭学習への取組の充実については、「家庭学習のススメ」の記載内容や記載方法を含め検討してきた。来年度ただ配るのではなく、その有効な活用方法等も検討したうえで、授業同様、市内全教員の意識化を図っていく必要があると考えている。2月の教務主任対象の研修会を経て、「家庭学習のススメ」の来年度改訂に向け、今後取り組んでいく。

知立市学校教育スタンダード「かきつばた」

か：課題（めあて）とふり返り（まとめ）を明確に、授業に見通しを！

子どもの学習意欲を高めるためには、「何が分かり、何ができるようになるればよいか」という授業の見通しをもたせることが大切である。そこで、その見通しを、子どもの視点に立った「課題（めあて）」として設定する。そして、何を学んだのかを子ども自身が評価する「ふり返り（まとめ）」の場を設定することを大事にする。

き：「聞く」「話す」「書く」学習スキルの習得を！

言語活動の基幹となる「聞く」「話す」「書く」などの学習スキルの習得は、思考力・判断力・表現力を育成する上でとても重要である。そこで、発達段階に応じた学習スキルを明確にし、それらの習得・向上をめざした取組を推進する。

つ：伝え合い、学び合う授業づくりを！

「伝え合い、学び合う授業」を展開するに当たっては、自由に誰もが発言できる学級の雰囲気づくりが大切である。そして、子どもたちが「学びたい」「解決したい」と思えるような課題設定（「か」課題参照）から、個人での追究の充実を図り、活発な意見交換につなげるような授業展開に心がける。

ば：板書で子どもの思考の足跡を！

授業の板書は、1時間の授業における「課題」と「成果」が視覚的に表れるものにする。そうすることによって、児童生徒が授業で分かったこと、できたことの「ふり返り」がしやすくなり、次時の意欲をかき立てることにつながる。また、板書の検証によって、教師の力量向上につなげることにも有効である。いわゆるPDCAサイクルの活用によって板書のスキルアップにつなげる。

た：だれもが「わかる」「できる」授業を！

子どもたちが授業に主体的に取り組むようにするためには、「わかった」「できた」という充実感を覚え、自分自身を肯定的にとらえる気持ち（自己有用感）を育むことが大切である。そのためには、学級の中の全ての子どもたちにとって分かりやすい授業を行う「ユニバーサルデザインを意識した授業」と、全員の子どもたちの発言と小グループでのコミュニケーション活動を確保する「参加型学習」を推進する。

家庭学習のススメ

子どもたちの健やかな成長を応援しましょう！

子どもたちに「確かな学力」を身につけさせるために、家庭学習の充実が重要であると言われています。そこで、知立市学力向上研究推進委員会では、家庭学習の充実をねらい、「家庭学習のススメ」を作成しました。このリーフレットを活用して、子どもたちが毎日自主的に家庭学習を進められるように、ご家庭でのご支援をお願いいたします。



家庭学習をがんばると・・・

- ①毎日復習することで、授業で学んだことがしっかり身につきます
- ②予習をしておく、授業がわかりやすくなり、発言が増えます
- ③「できた」「わかった」という達成感が感じられるようになり、学校が楽しくなります
- ④積極的にいろいろなことにチャレンジする姿勢が育ちます

家庭でできることは・・・

- ①学習環境をつくること
 - ・学習する時間をつくりましょう
 - ・整理整頓をしましょう
- ②学習できる体をつくること
 - ・早寝早起きを心がけましょう
 - ・食事（特に朝食）に気を配りましょう
- ③やる気を引き出すこと
 - ・元気にあいさつ、そして、楽しい会話をふやしましょう
 - ・認め、褒め、励ますことを心がけましょう

ごはん、パンなどは
頭のスイッチを入れます
サラダなどは
腸を元気に目覚めさせます



朝食をきちんと食べて、よい1日のスタートを！

「家庭学習のススメ」見開き

家庭学習を見直そう！

小学生の学習時間の目安
学年×10分+10分

1・2年生 まいにちじかんをきめてべんきょうしよう！

- ・まいにち、きょうかしょをこえにだしてよもう
- ・まいにち、もじをかくれんしゅうをしよう
- ・だしざん、ひきざんがしっかりできるよ、なんどもれんしゅうをしよう
- ・2年生は、九九がしっかりいえるよ、なんどもれんしゅうをしよう
- ・本をたくさんよもう



おうちの方へ

この時期の子どもは、何でも知りたい、できるようになりたいという気持ちでいっぱいです。褒めて、認めることで子どもはさらにやる気になります。ただ、自ら進んで家庭学習に取り組むことはまだまだ難しいです。低学年の間は、できるだけ一緒に取り組むようにしましょう。それが、褒める、認めるチャンスにもなります。



おうちの方へ

この時期の子どもは、学校生活にも慣れ、活発に活動するようになります。カード集めなど好きなことに熱中し、グループで遊ぶことも増えてきます。自己主張が強くなり、行動範囲も広がります。自分でやろうとすることは、低学年のときに比べ増えてきます。ここで根気強く声をかけ励ますことで、家庭で学習する習慣がしっかり身につけてきます。学校での様子を話題にするのと同時に、宿題や持ち物を時々点検するなどして、お子さんの学習への取り組みを応援しましょう。

我が家のチェックシート

子ども



- 決まった時刻に勉強しています**
毎日なるべく決まった時刻に勉強しましょう。これが習慣になると、学力アップにつながります。
- 目標を決めて取り組んでいます**
「漢字を覚える」、「このページを〇分で終える」など、目標を決めるとやる気が出ます。目標が達成できると、次へのやる気も出てきます。やれることから、だんだんレベルアップしていきましょう。
- テレビや音楽は消して勉強しています**
「ながら勉強」は、頭に入りません。かえって時間がかかってしまいます。
- 机の上は整頓し、落ち着ける場所で勉強しています**
勉強で使うものが整頓されていると、集中して勉強ができます。
- 体全体を使って学習しています**
教科書を見ているだけでは、なかなか頭に入りません。声に出して読んだり、大切なことをノートに書いて何度も解いたりするなど、目、耳、口、手を使って学習すると、頭に入りやすくなります。

おうちの方



- 早寝早起きができています**
- 元気にあいさつができています**
- 朝ごはんをしっかりと食べています**
- 前日のうちに学校の準備ができています**
- 勉強する時間を決めています**
- お手伝いなど家での役割があります**
- 会話が長く、よく話をします（たくさん褒めています）**

5・6年生 長い時間勉強しよう！

- ・すらすらと教科書が読めるようになるまで、声に出してくり返し読もう
- ・漢字の読み書きがしっかりできるよ、何度も練習をしよう
- ・小数や分数の計算など苦手な計算がしっかりできるよ、何度も練習をしよう
- ・ドリルやテストでまちがえたところを、できるまでやってみよう
- ・本をたくさん読むとともに、興味ある新聞記事も読もう



おうちの方へ

この時期の子どもは、少しずつ自我が目覚め、周囲に対して自分の考えを主張するようになってきます。心の成長や深まりが見え始めるこの時期だからこそ、以下のように温かく見守り、励ましていきましょう。

- ・お子さんの思いや考えを真剣に受けとめましょう
- ・他の子との比較ではなく、お子さんなりのがんばりを認めましょう
- ・「やればできる」と、ねばり強く励ましていきましょう

中学生の学習時間の目安 学年×1時間+1時間

中学生 予習・復習をしっかりとしよう！

- ・しっかりと集中して学習できるように、時間を区切って取り組もう
- ・教科書やノートを使って、復習をしっかりとしよう
- ・教科書や問題集で、できなかった問題は理解できるまでやり直して、できるようにしておこう
- ・考えをまとめたり、記憶の強化を図ったりするために、何度も書いてみよう
- ・新聞や本をたくさん読もう



おうちの方へ

この時期の子どもは、社会性が広がり、感受性が深まります。友達の間や大人の対応には敏感です。特に自分が納得できないことや不公平な扱いに対しては、反発したり傷ついたりすることがあります。また、進路選択など、見えない将来への不安から心は揺れ動いています。そこで、親として、家族として、以下のように支援していきましょう。

- ・結果だけでなく、努力している姿を認め、励ましていきましょう
- ・子どもの主体性を伸ばせるよう、長所を認めましょう
- ・目先のことだけでなく、長い目で子どもを見守りましょう

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着
に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

算数に関しては、A・Bともに県の平均点とそれほど違いはなかったが、国語に関しては、平均を下回った。そこで国語A・Bに関してどのあたりが弱点となっているのか、分析してみた。

国語A

	平均正答率	中央値	標準偏差
知立小学校	70.9	11	3.2
愛知県	71.4	11	3.2
全国	72.9	12	3.1

【分析】・書くこと・読むことが県・全国より大きく下回っている。話すこと・聞くことは県の平均よりも高い。

国語B

	平均正答率	中央値	標準偏差
知立小学校	52.7	5	2.4
愛知県	56	6	2.5
全国	57.8	6	2.4

【分析】・愛知県・全国の平均を大きく下回った。（昨年度も同様）
・正答率を見てみると、1問、2問、3問しか正解できていない児童が全国と比べて多い。
・答えを選択で選ぶことができる問題については、無回答率は他とそう変わらないが、書かなければいけないところになると無回答率がぐんと高くなる。→何とか答えたいという気持ちはあるが、記述式になると限界になるようである。

(2) かきつばたスタンダードの課題

- ・自分の考えを明確にするために書く。
- ・伝え合い、学び合うための授業づくりをする。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

①授業の実際

2年1組の実践で、学活の時間に行った「ひもとり」（2人1組で相手の体についているひもを取り合う）について文章を書いてみることにした。

ア 作文のもとになる「はじめ」「なか」「おわり」をメモで作る。

ワークシートに「はじめ」「なか」「おわり」を意識させながらメモを貼らせていった。

イ 自分で作ったアのメモの下に友達からの質問メモを付け足した。

より詳しく具体的に文章を書いていくために、アで書いた文を友達に見せて、分からないところや、より知りたいことをメモで書いてもらい、アのワークシートの下につけてもらった。

ウ メモの並び替えを行った。

イのあと、出来事が起こった順にメモを並び替え、1つの文章としてまとめられるよう工夫した。

エ まとまりのある文章を書かせる。

ア、イ、ウの活動のあと、これらを参考にしながらまとまりのある文章を書かせてみた。出来事が起きた順に文が書かれており、分かりやすい文章を書くことができた。

(2) 学校全体での取組

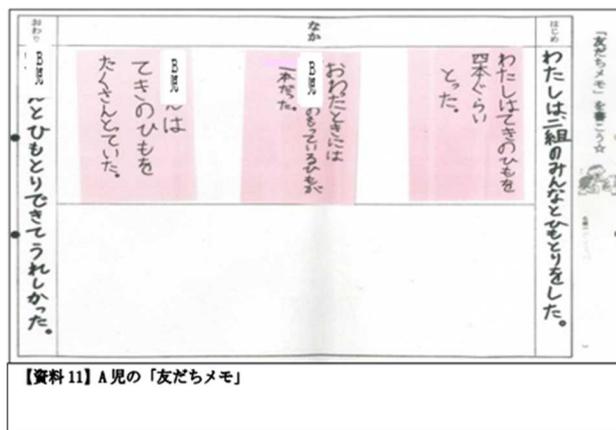
本校の本年度の研究主題は「主体的に考え、学び合う子を目指して」である。このテーマのもとに、本校では3回、元豊田市立小学校長前田勝洋先生を講師としてお招きし、授業研究会を行った。(9月8日(授業づくり研修会)、9月20日(1年生生活科授業研究)、11月25日(4年生理科授業研究))

(3) 家庭への働きかけ

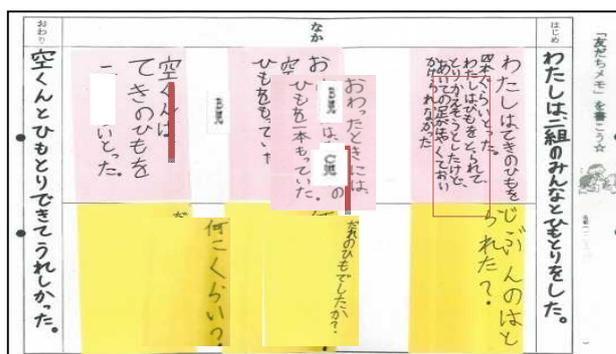
7月と12月に本校では、個人懇談会を行っているが、その前に全学年算数と国語の「まとめテスト」を行っている。そのテストは今までに学習したところの単元を少しずつ入れて学年の教員が作成したもので、それを個人懇談会で提示する。そのテストを見れば、子どもがどこの単元を苦手としているのか、保護者に知らせることができる。それに基づいて家庭学習をより充実させてもらうようお願いしている。

3. 取組の成果の把握・検証

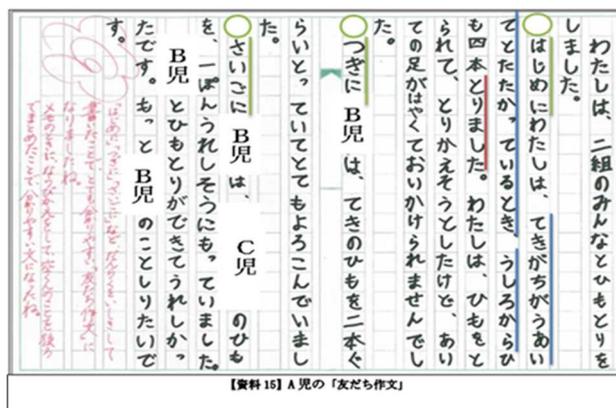
2年1組の「書く」ことへの取り組みでは、多くの児童がまとまりのある文章を書けるようになった。授業後のアンケートでは「上手に文章が書ける」と答えた児童は60%にまで上昇した。(授業実践前43%) 家庭への働きかけの部分では「苦手なところが分かり、夏休み中に一緒に勉強した」という意見をいただいた。



【ア はじめ・なか・おわりのメモ】



【イ 友達のメモを付け足す】



【エ まとまりのある文章を書く】

4. 今後の課題

今回の2年の実践では、友達と関わり合いながら、自分の書きたいことについて気づかせ、文章をまとめて書くという授業を行ってきた。2年生の段階ではこれで十分かも知れないが、全国学力学習状況調査の国語のようなテストで、書く力をつけていくためには、これだけでは十分ではない。各学年で段階に応じた力をつけさせ6年生になったときに、一定の文章を読み、要点を理解し、まとめる力がついていることが必要となる。これからも全校で「書く」ことに対して、計画的に学習を続ける必要があると考える。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立猿渡小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

ア 全国平均との比較

国語	欲・態度	関心・意	能力	話す聞く	書く能力	読む能力	技能	知識理解	算数	欲・態度	関心・意	考え	数学的な	技量	知識理解
2年生	○	▲	▲	◎	○	2年生	○	▲	○	▲					
3年生	◎	▲	▲	▲	▲▲	3年生	◎	▲	▲	▲▲					
4年生	▲	○	◎	○	○	4年生	○	◎	◎	◎					
5年生	○	▲	▲	◎	▲	5年生	▲	◎	◎	◎					
6年生	◎	○	◎	◎◎	◎	6年生	○	◎	◎	◎◎					

注) ◎…全国平均より高い ※◎◎…全国より優れている

○…全国平均よりとほぼ同じ ▲…全国平均より低い

※▲▲…全国に比べて努力を要する

イ 全国平均と比較して

- ・算数に関しては、4年生から6年生にかけて全国平均を上回っている。これは3年生より算数において習熟度別少人数授業を行っており、その成果が表れている可能性がある。2月に行う学力テストの結果が楽しみである。
- ・国語と算数を比べると国語が全国と比べて低い傾向にある。全校で読み聞かせや読書週間での様々な取組等に力を入れてきたので、その積み重ねが現6年生の結果に表れているのかもしれない。

(2) かきつばたスタンダードの課題

研究主題は「自らの考えをもち、表現する猿渡っ子の育成～発達段階に応じた言語活動の工夫を通して～」である。この主題を研究していくためには、問題解決的な学習が必要である。知立市学校教育スタンダード「かきつばた」の「課題（めあて）とふり返り（まとめ）を明確に、授業の見通しを！」に関して意識して授業を組み立てていくことで、研究主題に

せまることができると考えている。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

教師の力量アップのために、様々な分野で活躍する先生方に来ていただいて、教員としての力量アップに取り組んだ。

5月に東郷町施設サービス健康事業部の巢立隆宏先生に来ていただいて児童の体力向上に向けた指導法を学んだ。



【体力向上に関する講習会】

8月には、学芸会に向けて児童をよりよく指導していくために、劇団「うりんこ」の方に来ていただき、事前に演劇指導を学び、また学芸会前には、実際に児童の演技を見て、よりよい演技ができるように教員ともども指導していただいた。



【演技指導勉強会】



【指揮法を学ぶ】

本校は音楽専科の教員がおらず、児童の音楽指導は担任が行う。そこで今年度は地域のピアニスト田島洋美先生をお招きし、実際に児童を指導していただきながら、教員も歌唱指導や指揮法を学んだ。

1月には、佐藤洋一愛知教育大学教職大学院教授に来ていただいて、「猿渡小学校における主題研究の構想と今後の課題について」というテーマで今後の授業力向上に向けて話をいただいた。



【佐藤教授によるご指導】

これらの研修以外にも、本年度は水泳のインストラクターや陸上指導の補助員として大学生や大学院生に来ていただいて、共に指導しながら授業力を磨いた。

(2) 学校全体での取組

- ・「わかる」「できる」「楽しい」授業を展開していくために「知立市学校教育スタンダード」の活用を徹底し、基礎基本の定着を図る。学校訪問の指導案にも活用した。
- ・表現力を高め、主体性を育むために授業改善を図る。「自らの考えをもち、表現する猿渡っ子の育成」を目指し、主題研究に取り組み、各学年授業、低学年、高学年代表授業、主題全体授業に取り組んだ。

(3) 家庭への働きかけ

年2回の個人懇談を利用し、国語、算数を中心とした学習活動を中心に保護者と話し合い、子どもたちが充実した学校生活を送れるように取り組んだ。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 1年算数「たし算」の合併と増加の場合についてを扱った「おはなしえほんで かんがえよう」の実践

加法の意味を形式的に理解させ、単に計算ができればよいというのではなく、児童自身が日常生活の場面や具体的な活動を通して加法の意味をとらえ、理解していくように授業を構成した。そのために、単元を通して「おはなしえほん」を活用した動作化を取り入れ、問題の意味をしっかりと理解させながら、楽しく取り組めるようにした。また、実物提示や日常生活につながる場面絵などを使い、授業を組み立てた。



【意欲的に発言しようとしている場面】

単元のまとめとして、絵本の内容を考えながら、学習を展開することは、子どもたちにとって大変興味深いことであった。そこで、だれもが「わかる」「できる」授業を行うために、授業の初めに課題について大型テレビで説明したり、数図ブロックの操作が困難な児童には、ペアトークやグループトークを取り入れたりと、「わかった」「できた」という充実感をもたせた。

(2) 3年道徳「本当の親切とは」の実践

2つの行為を比較し、それぞれがどういう親切であるのか、共通点や相違点などを自分の言葉で話したり、考えたりすることができるようになってほしいという願いのもと授業を行った。本当の親切とはどういうものなのか、思いや考えを関連づけたり、位置づけたりする働きかけをし、より深い伝え合いや学び合いができるように取り組んだ。



【自分の気持ちを伝え合う場面】

授業の中で児童は一生懸命考えて、発言をつなげていた。授業開始時には「人が何かをしてくれることが親切」という意識でいた児童がほとんどだったが、迷っている場面について考え、意見を交流することにより、違う親切の形について考えを深めていくことができた。また、教師の問い返しにより、主人公の行動から、どんな思いだったのかを考え、伝え合うことができ、「親切」についてより深く考えることができた。

4. 今後の課題

授業中、発言できる児童は一生懸命考え、楽しそうに授業に参加することができている。授業を通して自己充実感を得ることができ、自己肯定感につながっている。しかし、ただ聞いて

いるだけで発言しない児童もいるので、どの児童も参加できるための支援方法等の工夫が必要である。また、本校の主題「自らの考えをもち、表現する猿渡っ子の育成～発達段階に応じた言語活動の工夫を通して～」を意識した授業を考える中で、子どもたち一人一人が分かる喜びを味わうことができるように取り組んでいかなければならない。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立来迎寺小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

算数で少人数指導の成果が見られる。主題研究の成果も見られ、子どもたちの学習への取組方、意識に成長が見られるが、課題としては国語Bへの対策である。児童質問用紙からは、「友達の意見を聞くことができるが、友達の前で考えや意見を発表することは苦手である」という結果から、ペア学習やグループ学習を取り入れていく必要がある。

(2) かきつばたスタンダードの課題

「か」課題設定については、よい傾向が見られるが、振り返りが少し低い。

「き」どの項目も比較的良好にできているが、「話す」ことがやや苦手な子が多い。

「つ」学級づくりを意識して取り組み、認め合い温かく聴き合う雰囲気は定着している。しかし、子どもたちが「つなげて話す」ことに自信をもてていないことから、一斉授業から脱却して、考えて練り合う学習を展開していく必要がある。

「ば」板書に不安をかかえる教員が多いと思われる。授業の流れ、子どもの思考の足跡がわかる板書、振り返りがしやすい板書の工夫が必要である。

「た」一人一人を大事にし、実態をとらえた指導ができているが、「ユニバーサルデザイン」を意識した授業を展開することがまだ不十分と思われる。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

- ・ 主題研究に学校全体で取り組む。
- ・ 知立市学校教育スタンダード「かきつばた」を意識した授業を実践する。
- ・ 算数の少人数指導に取り組み、学習のつまずきの把握と解消に努め、基礎学力向上を図る。
- ・ 11月24日学力向上に関する現職研修「アクティブラーニングと育成すべき資質・能力」（講師：中部大学准教授 小笠原豊先生）



【5年道徳授業：板書が思考ツールに】

(2) 授業以外で学校全体での取組

- ・基本的な学習習慣を確立する。
- ・スキルアップタイムに計画的に取り組み、聞く・話す・書く技能を身に付ける。
- ・読書活動を推進し、高学年は新聞記事に親しむことを奨励する。
- ・長期休業時に「学びの日」（補充学習）を実施し、学習内容の定着と振り返りを図り、学習課題への取組効果を向上させる。

(3) 家庭への働きかけ

- ・家庭学習を奨励し、計画的に宿題を出す。
- ・宿題を毎日きちんと提出させ、家庭学習への取組状況の把握と評価を繰り返し、意欲の向上を図る。
- ・学校日より、保健日より、学年通信で、家庭学習や規則正しい生活習慣・学習習慣、正しい姿勢の意義を保護者に説明し、定着への協力を促す。
- ・保護者懇談会で、児童の学習や生活の現状を情報交換し合い、学習や生活の向上に向けての協力を呼びかける。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 思考する場の設定と学習スキルの定着

- ・特別支援学級で、お礼の手紙を書くときに、思考ツール「なぜなにシート」を使うことで、内容や順序を考えて書くことができた。き
- ・1年生で、いろいろな情報を整理するとき思考ツール「マトリックス」を使い（インプット）、紹介文を書く（アウトプット）ことを繰り返し行うことで、書く力が伸びた。低位の子ほど有効だった。き・た
- ・6年生では、小グループの話し合いの中で友達同士が互いの意見や考えを認め合うことで、低位の子も達成感を得られた。つ・た

(2) 思考力と言語力の向上

- ・スキルアップタイムを利用して、思考ツールの使い方を学んだため、授業ですぐに使えた。また書く活動「百マス作文」を取り入れたことで、書くことへの抵抗が減ってきた。き
- ・4年生では、「スケッチ作文」に思考ツールを活用したことで、五感を使った擬態語・擬音語・比喻等を用いることができるようになり、表現力が豊かになった。き

(3) 板書を利用した学び合いの深まり

- ・2年生では、板書に記された思考ツールを見ることで、子どもが考えをもち、関わりが深められた。5年生では、道徳の授業で、板書に「気持ち」を視覚化する（思考ツール「関係図」に表す）ことで、立場を自分に置きかえて考え、話し合うことができた。つ・ば

4. 今後の課題

- ・学んだことを実生活に生かすために、継続して「自分の考えを深める授業」を実践していかなければならないと感じた。
- ・子どもたちの学びがよりアクティブになるように、子どもたちのこういった「思考スキル」

を育てていきたいのかをよく考えて、子どもたちの思考の手助けとなるような「思考ツール」を活用していきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立東小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

外国人児童が6割を占めている本校では「題意が分からないので問題を見ただけであきらめてしまう」「何度も読み返さないと内容が理解できない」児童が多い。標準学力検査(CRT)の結果は、国語・算数ともにすべての領域において得点率が全国平均に及んでいない現状である。学力の土台となる日本語指導がいかに大切であるかを知るため、外国人児童と日本人児童にデータを分けて得点率を分析したところ、日本人児童の得点率が多くの領域で全国平均を上回っているのに対して、外国人児童の得点率は大きく下回っていることがわかった。不足している語彙を補うための手だてを根気強く続けるとともに、国語・算数における少人数指導をさらに充実させていく必要がある。

(2) かきつばたスタンダードの課題

知立市学校教育スタンダードとして取り組んでいる授業の基礎・基本「かきつばた」について本校の実態は以下のようなものである。

- ・課題(めあて)を明確にして見通しをもった授業を展開している。[か]
- ・「聞く」「話す」「書く」のスキルを習得させることが難しい。[き]
- ・考えを深めていく主体的な授業づくりが難しい。[つ]
- ・板書計画を立案して授業に臨んでいる。[ば]
- ・だれもが分かる授業を工夫して実践している。[た]

このような実態から、教師一人一人がさらに授業力を向上させて「考えを深めていく主体的な授業づくり」を進めるとともに、児童の「聞く」「話す」「書く」のスキルを習得させる手だてを講じていく必要があると考える。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

主体的な授業づくりとは「伝え合い、学び合う授業」をつくっていくことである。教師一人一人が授業力を向上させてキャリア教育を推進することが、主体的な授業づくりにつながると思う。そこで「自分に自信をもって前を向いて生きていく子」をめざしてキャリア能力を育む授業を実践した。授業の研究にあたっては、愛知教育大学真島聖子准教授にご指導をいただきながら進めてきた。9月16日、29日には研究授業全体会を設け、真島聖子准教授にお越しいただき、全職員が

指導助言をいただく機会とした。研究授業を通して、本校の子どもたちにとって必要なキャリア能力を「自分を見つめる力」「共に歩む力」「行動する力」「将来を見据える力」と設定したことの妥当性についての共通理解を図ることができた。単元ごとにめざす子どもの姿を明確にして、キャリア能力を育むための工夫を授業の中に取り入れていくことを今後も続けていきたい。

【実践例】 2年生活科「みんなの町はすてきがいっぱい！」

＜身に付けさせたいキャリア能力＞

♠自分を見つめる力	♥共に歩む力	♣行動する力	◆将来を見据える力
自分の町のよさや町を支えている人たちの思いや努力に気付くことができる。	自分の町のよさや町を支えている人たちの思いや努力を感じ、それらのよさを伝え合う中で共有することができる。	自分の町や町を支えている人たちの思い、自分達にできることを行ったり、伝えたりしようとするすることができる。	地域の人にあいさつしたり、地域の行事に参加したりするなど、積極的に関わろうとすることができる。

＜キャリア能力を育むための工夫＞

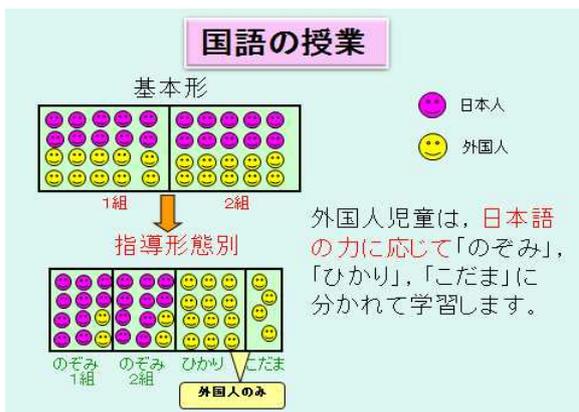
- ♠「お仕事修行体験」を通し、地域の人たちと何度も関わり、その思いや努力、地域を大切に思う気持ちに直にふれることで、自分の町のよさをより感じられるようにする。
- ♥「お仕事修行体験」での経験を伝え合い、共有する場を設定することで、多くの人たちが地域の中で努力し、自分の町を支えてくれていると感じることができるようにする。
- ♣東っ子発表会に「お仕事修行体験」でお世話になった人たちを招待することで、地域の人々への思いを高め、自分の町を支えてくれている人たちのよさをすすんで伝えることができるようにする。
- ◆自分の町を支えてくれている人たちと何度も出会わせることで、それらの人たちの思いや努力を身近に感じられるようにし、自分の町や町を支えている人たちに愛着をもつことができるようにする。

(2) 学校全体での取組

日本語の力に大きな差がある状態のまま国語の一斉授業を行っても成果は上がらない。それぞれの日本語力に見合った指導形態を考える必要がある。また、算数の学力を定着させるためには、児童個々の習熟度を把握した上で習熟度別にグループを編制した少人数指導が有効であると考えられる。そこで、国語は指導形態別、算数は習熟度別で少人数授業を行うことで学力の向上を図る。

＜国語の指導形態別による少人数授業＞

- ・日本語の習得状況により、学年（全学年2学級）を4つのグループに分ける。
- ・「のぞみ1」「のぞみ2」は担任が、「ひかり」「こだま」は日本語担当が指導する。
- ・各グループの指導形態
 - 「のぞみ」：教科書を使い、発展学習を含めた国語の授業
 - 「ひかり」：必要に応じてリライト教材を使い、基礎学習を中心とした国語の授業
 - 「こだま」：リライト教材を使い、日本語指導を軸にした国語の授業



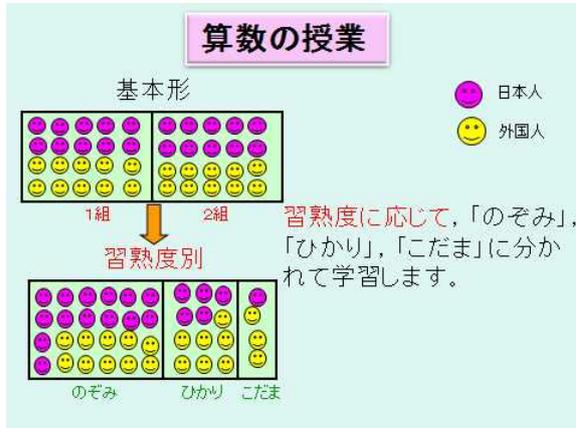
【指導形態別少人数のしくみ】



【少人数授業の様子（国語こだま）】

<算数の習熟度別による少人数授業>

- ・習熟度により「のぞみ」「ひかり」「こだま」の3グループに分ける。
- ・「のぞみ」は担任が指導し、「ひかり」は担任と日本語指導担当（T2）の2名で指導する。「こだま」は、少人数担当（T1）と日本語担当（T2）の2名で指導する。



【習熟度別少人数のしくみ】



【少人数授業の様子（算数こだま）】

(3) 家庭への働きかけ

「家庭学習のススメ」を各家庭に配付して以下の点について啓蒙した。

「まいにちじかんをきめてべんきょうしよう」 1・2年生

「学校で習ったことを復習しよう」 3・4年生

「長い時間勉強しよう！（学年×10分+10分）」 5・6年生

日本語の読めない保護者にはポルトガル語版を配付した。また、個人懇談会ではポルトガル語・スペイン語・タガログ語・英語の通訳を付け、外国人保護者にも家庭学習が大切であることを理解していただき、家庭での協力を仰いだ。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 授業の様子から

- ・国語の言語領域に関して外国人児童もよい結果が出始めている。特に「平仮名片仮名の書き」と「漢字の読み」はよくできている。これは国語の指導形態別授業の成果といえる。
- ・キャリア能力についてのめざす子ども像を明確にすることで、具体的なイメージをもって授業を展開することができ、児童が活躍する場面が増えてきた。
- ・「なにになに金曜日」で新たな言葉を獲得した児童が、その言葉を使いたいという思いをもつようになり、授業で活発に発言する姿が多く見られるようになった。

(2) 標準学力検査（CRT）の結果より

平成28年2月に実施した標準学力検査（CRT）の結果は、国語・算数ともにすべての領域において得点率が全国平均に及ばなかった。平成29年2月に実施予定の検査の結果を1年前のものと比較することで、取組の成果を検証していきたい。

4. 今後の課題

本校は転出入が多く、在籍児童の1割以上が年間で入れ替わってしまう。日本語を獲得した児童が転出し、日本語の話せない児童が新たに編入してくる。このような状況の中で、学校全体としての学

力向上は非常に難しい。平成29年度は日本人17名に対して外国人46名の新入生が入学する予定である。これまで以上に外国人児童の日本語指導に力を入れていかなければならない。また、日本人児童の学力向上も、おろそかにすることなく取り組んでいきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立西小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

平成28年度全国学力学習状況調査の結果、本校の児童の課題が見えてきた。国語・算数ともに概ね全国平均を超えている。国語科では、新聞をよく読み、読書が好きであるという面が伸びてきた一方で、話の内容を精選してまとめるといった「話す・聞く」力に課題が見られた。また、資料を読み取り、適切な使い方を考える問題では、弱さを感じられた。算数では、積極的に問題の解法を考えられる子が多くいるが、記述式の問題にあまり意欲的に取り組めない実態が明らかになった。また、学校評価アンケートでは、授業を楽しんでいると感じる子どもが増えている一方で、「授業中発言をしている」と答えた子どもがやや減少した。これは、自分の考えに自信がもてず、積極的に自分の思いや考えを表現できない子どもが多くいるということであると感じる。

本校では、これらの実態から、他者とのかかわり合いを通して、他者の思いや考えを受け止め、自分の思いや考えに自信をもち、積極的に表現できる子の育成が課題であると考えた。

(2) かきつばたスタンダードの課題 : 伝え合い、学び合う授業づくりを!

「伝え合い、学び合う」児童を育成するためには、教師の授業づくりがポイントである。教師が一方的に説明をし続け、子どもの考えを生かせない授業をしていては、児童は自分から探求しようという意欲はもてない。自分の考えをもたせ、友達とのかかわり合いを設定することで、児童は、多様な考えに触れ、自分の思いや考えを深めることができると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

愛知教育大学の志水廣先生をお招きし、授業研究協議会を2回行った。「かかわり合いの時間を設定しても、児童は自分の考えがゼロではかかわり合うことができない」という指導をいただいた。自分の



【志水先生のご指導】

考えをもたせるために教師はどのような支援を行っていくべきか、検討するきっかけとなった。また、「授業のゴールをあらかじめ設定する。それをめざして授業を構想する」「児童の考えを揺さぶる仕掛けを用意しておく」等、多くの示唆をいただくことができた。

(2) 学校全体での取組

研究主題を「自分の思いや考えを表現できる子～他者とかかわり合いを通して～」とした。特にかかわり合い、伝え合う力の育成を重視した。

今年度、新たに研究を進めるにあたり、まず自分たちがどのような授業を行っているかを見直すところから始めた。そのために、全ての教員が、自分の授業を録音し、紙面に文字として起こした。そして、教師の登場と児童の発言の比率を示し、検証した。その結果、児童に考える時間を十分に与えないまま発問する姿や、必要以上に教師がしゃべりすぎ、児童の発言を繰り返したり、説明しすぎたりして、児童の考えを阻害する姿が見られた。児童の表現力を育てるためには、教師の授業づくりを検討するところから考える必要があった。

まず、授業には「自分の考えをもつ」「かかわり合う」「まとめる・ふりかえる」という3段階が必要であることを全体で確認した。また、授業のゴールに児童からどのような表現が出されることを期待して授業を構想するのかを明確にするために、指導案に「めざす表現」を明記した。そして、自分の考えをもたせ深めさせるためには、教師はどのように支援の言葉がけをし、かかわり合いを設定していくかも指導案に含め、あらかじめ検討した。

さらに、児童の表現する力の基礎とするため、フリートークや書けマス作文（三宅祐児氏『百マス作文』をもとにした本校独自の作文様式）、ハンドサイン・話型の提示などに全校で取り組んだ。



【1年生 ペアトーク】



【短学活でのフリートーク】

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 1年国語「おとうとねずみチロ～どの場面のチロが好きか紹介しよう～」大塚悠矢教諭

自分の考えをもつときの手助けとなるように「心の風船」を取り入れた。風船の位置関係で登場人物の感情を視覚的に捉えられるようにするためである。また、両方の気持ちが入り混じっている様子を表せるように、二つの風船にした。第8時では第7時でまとめた「個」の考えをもとに、①ペアでの対話②全体での対話、と段階を追ってかかわり合いの場を設定した。全



【登場人物の心情を風船の位置で表現する】

体では、2つの風船が同じぐらいの位置にある立場の意見から始まった。最後の「今日のチロはどんなチロか」という教師の問いかけに対して、クラス全体としては、にこにこ風船がやや上にありながら、2つの気持ちが心で拮抗している状態と考えるようになった。児童は多様な考えに触れ、他者の考えを自らの考えに加えたり、新しく思いついた考えを加えたりすることができた。

(2) 4年算数「しきつめよう！ はかってみよう！ 西小学校！」 鈴木加代子 教諭

面積の求め方を考える授業では、自力解決で少なくとも1つのやり方は自分で考えることができるようにと考え、全体での見通しの時間をしっかりと取ることを意識して授業を行った。2つの長方形に分けて考えて最後に合わせる、大きい長方形が少し欠けた形なのではじめ大きい長方形だと考えて後で余分なところを引く、といった考え方のヒントが、すらすらと出てきた。そこで、分けることの意味や測る箇所などの細かなところも全体で確認してから、自力解決に入ることができた。



【自分の考えを説明する児童】

自力解決の時間の後、3人組で自分の考えをノートを見せながら説明する時間を設けた。自分の考えに自信をもち、全体での発表につながるようにとのねらいで行った。その後さらに、友達の説明を聞いて、取り入れたいことがあれば書き足してもよいこととした。普段の授業から、友達の説明することを大切に聞き、受け入れることを重視したり、グループや全体でみんなに説明する活動を意識的に取り入れたりしていたため、どの子も自分なりの言葉で意欲的に、自分の考えを友達に話したり、自分の考えを式だけでなく言葉で説明したりしながらノートに記すことができていた。

4. 今後の課題



【かかわり合う】

授業の中で、少人数での話し合いを取り入れることは、これまでも本校では意識してきた。しかし、自分の考えをもてないまま、グループで話し合う時間を与えられても、児童は友達とかわることができない。かかわり合う前提として、自分の考えをもてるように、教師は手だてを講じなければならない。また、グループトークをするにも様々な形態があり、その場面に応じた目標をしっかりとつことを意識してきた結果、効果が見られた。かかわり合い、他者の意見を取り入れることによって、児童の思

いや考えは豊かになった場面がいくつか見られた。今後も、児童が「かかわり合うこと」に意味を見出し、効果的な支援のあり方を研究していきたい。教師の支援のあり方は、授業により様々である。志水先生から教えていただいたことの一つに「児童の反応を徹底的に予想し、それに応じた支援の方法をあらかじめ準備しておくこと」がある。今後も、児童一人一人を見つめ、児童が主体的に思いや考えを表現できる方法を模索していきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立八ツ田小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

昨年度末のCRT教研式学力検査で、平均得点率が全国比100を超えたのは、4年生だけで、他学年は82～99で全国比を下回った。また、4月に実施した全国学力・学習状況調査に教師自身も取り組み、今どんな学力が必要とされているのかを分析してみた。以下は、先生たちが学力テスト問題に取り組んだ後、アンケートに答えた意見である。

- ・国語、算数共に様々な資料から読み取る力と自分の考えを表現する力が必要である。
- ・自分の考えを文章や式などで、順序立てて論述する力を要求される。
- ・算数の授業で、自分の考えを口頭で説明したり、記述したりする経験を積む必要がある。
- ・いろいろな文章（本や新聞）などを読み、限られた文字数の中で要旨をまとめたり、感想を書いたりする学習を取り入れたい。

(2) かきつばたスタンダードの課題

このような結果は本校の主題研究のテーマである「自尊感情を高める児童の育成」とも関連し、学級指導や教科授業への取組の手だての中にも既に盛り込まれている。

- ・手だて①…通常の授業において、子ども同士が意見を交換し、互いの考えを深めたり、新たな考えを生み出したりする時間を確保する。(つ)
- ・手だて②…授業の終わりに振り返りの時間を設け、自分のできたことや今後の課題を確認し、次の学習につなげ、家庭学習での補いや補強の目当てとする。(た)
- ・知立市学校教育スタンダードについては、指導案の中に具体的な手だてとして明記する。
- ・手だて③…愛知教育大学の磯部征尊准教授を講師として招聘し、「学級力向上」の取組を学級指導の中に取り入れる。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

知立市学校教育スタンダードを意識した授業の実践にあたり、学習指導案中にかきつばたの視点を取り入れた手だてを明記することや、授業の板書計画の作成を必ず実践することにした。

また、校内現職研修として、愛知教育大学名誉教授の川上昭吾氏による理科の模範授業や、岡崎市立男川小学校の清水良隆先生による道徳力向上講座などを実践し、授業力の向上を図った。また若手教員には、校長自ら参観授業を設定して指導に当たったり、中堅教員が自主的に授業実践の悩みについての懇親会を開き、互いの授業力を研鑽する場を設けたりした。

(2) 学校全体での取組

上記の手だて③にもあるように、愛知教育大学磯部征尊准教授を講師として招聘し(合計4回)、「学級力向上」の取組を学級指導の中に取り入れた。これは新潟大学附属小学校が実践している「子どもたちの子どもたちによる学級づくり」で、子どもたちに自分たちで考え、行動する力を育成していきたいと考え、それを授業にも生かし、学力の向上に結び付けていこうと考えた。自分たちの学級についてみんなで話し合うことにより、「この学級にいてもよい」「自分たちで、できた」「自分にもよさがある」「自分の意見が仲間の役に立った」といった自己存在感、自己効力感、自己肯定感、自己有用感を味わうことができ、自尊感情も高まると考えている。取組の具体的な内容は以下のとおりである。

- ・9月1日 研究授業準備① 「八ツ田式学級力について(オリエンテーション)」
- ・9月7日 研究授業② 「レーダーチャートを見て学級の問題を分析しよう」
- ・9月15日 研究授業③ 「レーダーチャートを見て学級の問題を分析しよう」
- ・10月4日 研究授業・協議会 「3年3組の学級力の取組について考えよう」

(3) 家庭への働きかけ

家庭への働きかけについては、毎月1回の学校公開日に、児童の学習の様子をできるだけ参観してもらえるように、参観日の授業の予定を詳しく知らせている。また、昨年11月に実施した「生活習慣に関するアンケート」結果から得られた本校児童の生活習慣の改善点について、「姿勢」に着目して学校保健会を開催し、5年生と一部の保護者が参加した。こうした生活習慣の改善も、子どもの学力を支える大きな要素となり得ると考える。今後「睡眠」「運動」「食事」「歯磨き」「学校での居場所」などのキーワードに着目して、子どもの生活習慣の向上、ひいては学力向上を図る実践となるよう、家庭への協力を呼びかけていきたい。

3. 取組の成果の把握・検証

授業場面における実践例 ～ペアトークで聞くしせいアップ大作戦～

計画 「聞くしせい」を上げて、話す人を嬉しい気持ちにさせるため、ペアトークをする。

評価 子どもたち同士で、よかったところを伝え合う。教師もよかったペアを伝える。

私が思いつかなか
った意見を言っ
たので、すごい。

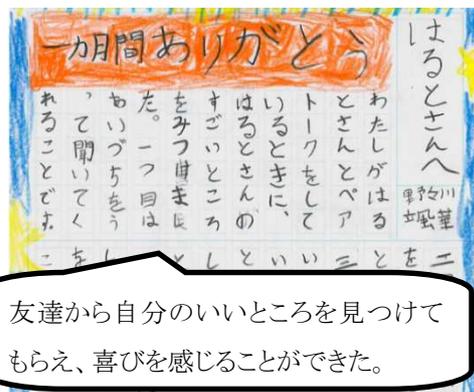


指さしたところを見
て聞いてくれてあり
がとう。



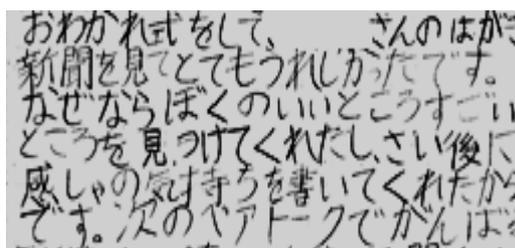
あいづちを打ちなが
ら聞いているペアも
いたよ。

評価 ペアトークのお礼をはがき新聞で伝える



友達から自分のいいところを見つけて
もらえ、喜びを感じることができた。

【はがき新聞】



【授業後の感想】

はがき新聞を用いて、読み合う場を設けることで、悩んでいる子の想いに気付き、悩む子がいなくなるように活動をしていこうとする心情と実行力が育った。また、いいところを書いてもらうことで、自分のよさに気付くこともできた。普段の授業の中でペアトークを行い、お互いのよさを認め合うことも、自分のよさを感じることに繋がった。日頃からこつこつと自分のよさを味わうことができる場面を増やすことが、居心地のよい学級風土を高め、自尊感情を高めることにつながると考える。

4. 今後の課題

読み取る力と自分の考えを表現する力の育成については、自己努力も必要ではあるが、相手がいる学習では、児童の人間関係や学級の中での存在感が大きく関わっている。そういう意味で、「学級力向上プロジェクト」に取り組むことは、大いに効果がある。自分の考えを口頭で説明したり、記述したりする力はそうした経験から育まれるし、通常の授業の中でも、自分の考えを文章や式などで、順序立て論述する力を育成できる授業を、各学年、担任が試行錯誤で実践を積み重ねていることが、今年度の研究集録からもうかがえる。

今後の課題としては、各担任が実践している内容を、学校全体の問題として共有し、一緒に悩み解決策を練ることで、何らかの方向が見えてくるのではないかと期待する。八ツ田小学校がチーム八ツ田として、「楽しい学校、みんなの学校」となる日をめざしていきたい。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立南小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

- ・2年（低学年）が全国平均よりやや低いが、3～6年は全国平均より高い。本校は、毎年低学年がこのような傾向にある。基本的な学習習慣の定着に原因があると考えられる。
- ・国語は「意欲関心態度」や「書く力」が低い。
- ・算数も「意欲関心態度」が低い。また、「数学的な考え方の力」が低い傾向にある。

(2) かきつばたスタンダードの課題

- き…主題研究の課題から、「聴く力」「話す力」「書く力」を高めていくことが必要
- つ…主題研究の課題から、コミュニケーション能力を高め「学び合うことができる子の育成」
- た…「だれもがわかる・できる」実感のもてる授業実践が必要

CSU活動「ペアトーク風景」→



2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

①「知立スタンダード かきつばた」をもとにした授業改善

き…主題研究として「聴く・話す・書く」ことを重点としてCSU（コミュニケーションスキルアップ）活動の充実を図る。

つ…主題研究「学び合うことができる子の育成」

- ・全体授業研究（1年生活科「たねといのち」と5年社会「自動車をつくる工業」の実践）
- ・全職員による授業実践（研究集録作成）

た…ユニバーサルデザインを取り入れた授業実践

- ・3年 算数「三角形」
(講師：志水 廣 先生)
- ・4年 理科「体が動くひみつを探ろう」
(講師：小笠原 豊 先生)



5年社会「自動車をつくる工業」授業・協議会風景



授業風景（算数・理科・小笠原先生）

②プロに学ぶ授業実践

(どの子にもわかる・できる実感のもてる授業づくり)

- ・ユニバーサルデザインを取り入れた算数の授業実践
…志水 廣先生の示範授業の実施（写真左）
- ・先行オーガナイザを取り入れた理科の授業実践



…川上昭吾先生の示範授業の実施（写真右）

③学力向上に向けての授業改善のための研修会

授業風景（志水先生・川上先生）

- ・志水 廣先生と鈴木百合子先生を講師に「わかる算数の授業」「音声計算」、「問題文理解のための手立て」、「じふく学習」（自復学習）について4回研修会を実施した。



学力向上研修会風景

④「ユニバーサルデザインを生かした授業実践」の推進

- ・通常学級に在籍する支援の必要な「児童へのアプローチの仕方」や「児童の特性を踏まえた指導・支援の在り方」を学ぶため、特別支援学級での研究授業を実施した。そして、教員が児童一人一人のニーズを正しく受け止め、どの児童にも「わかる・できる・楽しい」授業を目指した「授業のユニバーサルデザイン」を実践するよう努めた。



特別支援学級の授業研究風景

⑤教師の「かきつばた」授業改善意識アンケートの実施

「かきつばた」授業改善の意識の高揚をめざし、教師の意識アンケートを7月と2月に実施。

(2) 学校全体での取組

- ・コミュニケーション能力（聴く・話す・書く力）を高めるためにCSU活動を実施した。
- ・計算力を高める「音声計算」を実施し、事前事後での正答率調査と計算力実態分析を行った。
- ・長期休業時に学習相談会（個別学習）を実施し、学習内容の振り返りと定着、学習支援を進め、学習効果の向上に努めた。
- ・算数科における少人数指導（TTを含む）の実施
- ・ユニバーサルデザインを生かした授業で、視覚的支援に有効なタブレット等，ICT活用の推進
- ・「学力向上に向けての取組」（各学年毎）計画をもとに、前期終了後、後期の取組計画を再度作成し、学力向上に向けて取り組んだ。
- ・年度末にCRT学力検査を実施し、結果をもとに講師を招聘（6月と2月）し、学力課題に対する状況の把握と学力改善に向けての指導助言をいただき、学力補充を進める。



タブレットを活用した授業風景

(3) 家庭への働きかけ

- ・家庭学習の習慣化のために、「家庭学習のススメ」を再度7月の懇談会で配付し、家庭と連携して学習方法の定着を図る。低学年は、音読、漢字練習、音声計算をやって提出するよう指導する。高学年は、自主学習を推進し、自学ノートにより家庭学習の習慣化を図る。
- ・「家庭学習のススメ」啓発リーフレットを配付したり、学校だより、学年通信で家庭学習や規則正しい生活習慣の意義を説明したりして、定着への協力を促す。また、保護者懇談会で、家庭学習や、児童の学習、生活の改善にも触れ、連携して学力向上に努める。
- ・学校改善アンケートに「家庭学習について」の項目を追加し、変容を定量的に把握した。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

- ・「知立スタンダード かきつばた」をもとにした授業改善

き…聞いたことを書取り、理由を考えて書いたり、考えを整理したりする力がついた。聴くことを練習することで、意見を一生懸命聴いて、理解して付け加えたり、共感したりできるようになった。

つ…自信をもって全体場で発表できるようになってきた。また、意欲的に自分の思いや考えを発表したりできるようになってきた。そして、根拠や理由を挙げて発言する児童が出てきた。生き生きと話し合い、考えを深め合う子が見られるようになった。

学校改善アンケート結果比較表（調査対象数 630名）

アンケート項目	H27	H28	差
授業は分かりやすいですか	93.6	94.7	1.1
学校へ行くのが楽しいですか	86.5	89.4	2.9

「た」…ユニバーサルデザインを生かした「だれもがわかる授業実践」を積みかさせてきたことで、「学校が楽しい」「授業がわかりやすい」と回答した児童の割合が増加した。(上表) 学習の流れがわかり、子どもが次を予想して進んで取り組むことができるようになった。

- 教師の「かきつばた」授業改善の意識が少しずつ高まってきた。特に、「つ」「た」は意識が高くなってきた。

教師の「かきつばた」授業改善意識アンケート
(7月、2月調査比較;調査対象数24名)

項目	か	き	つ	ば	た
できている割合(A+B)増加累計人数	13	8	22	15	17

(2) 学校全体での取組

- 音声計算を毎日取り組むことで、計算が苦手な児童も四則計算に慣れ、正答率が上がった。また、習熟度の低い児童の計算力を高めるのに効果があった。(右表参照)
- ICTの活用により、子どもの興味関心が高まり、理解が深まった。また、安心して学習に取り組むこともできた。
- 算数科での少人数指導により、「わかりやすい」と回答した児童の割合が約90%であった。
- 長期休業中の学習相談会を通してゆっくり考え方を指導でき、苦手分野を補充できた。九九を克服できた。保護者の協力があった児童は学力が維持できた。
- きちんとノートを取ったり、自分の言葉や図、絵でまとめたりする児童が増えた。
- 「振り返り作文」を書くことで、反省を生かしたり、自分の思いを文章でまとめたりできる児童が増えた。
- 基本的な「聴く・話す」習慣が定着し、協働的な話し合いの場面が増えた。
- ペア、小グループでの話し合いで、話す抵抗感が減り、自信をもって話し合い活動に参加できる児童が増えた。

【音声計算事前事後正答率比較】(児童数500人)

音声計算比較	事前	事後	差
2年	98	98	0.4
3年	91	96	5.3
4年	87	96	8.9
5年	84	95	11.1
6年	93	97	4.1
平均	88	96	8.0

(3) 家庭への働きかけ

- 家庭学習を進んで取り組む児童が増えてきた。
- 音声計算、音読、漢字練習の継続により、基礎学力の定着に繋がった。特に、音声計算を家庭学習で進めることで、正確性と速さが上がった。漢字テストの正答率が上がった。

学校改善アンケート結果比較表 (調査対象数 630名)

アンケート項目	H27	H28	差
進んで家庭学習をした	59	62.2	3.2

4. 今後の課題

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

- 学力向上に向けての研修会、授業実践を通して、教師の「かきつばた」授業改善の意識が少しずつ高まってきたが、「つ」「た」等重点項目を設定し、いっそう共通理解を図り、学校全体で取り組めるようにする必要がある。
- 今年度実施した「学力向上に向けての研修会」で学んだことの実践と継続に努める。そして、「だれもがわかる授業」をめざした授業実践を推進する必要がある。

(2) 学校全体での取組

- 学力課題に対する状況を把握し、「学力向上に向けての取組」(各学年毎)をPDCAで具現化し、継続して意識して実践していけるようにする必要がある。
- CSU活動では個人差が見られたので、内容および支援方法を工夫する必要がある。また、CSU活動の推進により、主体的に学び合い、深め合うことのできる子の育成に努めていく必要がある。

(3) 家庭への働きかけ

- 学習が苦手な児童ほど家庭学習の意欲が低く、保護者の認識、協力も低い。今後は児童の「じふく学習」等、自主的な家庭学習の推進と「家庭学習」の啓発に努める必要がある。
- 個人差を減らすために、学力不振の児童について、長期休業中の学習相談会を充実させる等の学習意欲を高める手立てと学習支援を工夫する必要がある。そして、基礎学力の定着に向け、一層家庭との連携を推進していく必要がある。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立中学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

平成27年度全国学力学習状況調査、28年度4月実施のNRTの結果を見ると、国語、数学ともに概ね良好である。しかし、国語では「読むこと」はややポイントが低く、複数の資料から情報を得て自分なりの考察をすることや、文章を要約することがやや苦手であることが分かった。読むこととともに、根拠を明確にして自分の考えを書く指導に重点をおきたい。数学では、式の意味するところを理解したり、グラフや表から事象をつかみ取ったりすることがやや苦手であることが分かった。国語同様読むことに重点を置き、読解力の向上に重点をおきたい。このことは、理科にも言え、説明文の読解力が向上すれば更に正答率は上がると思われる。

また、生徒質問からは、家庭学習の時間が少なく、TVやゲームに費やす時間が多い傾向があることや、自己有用感があまり高くないことがうかがわれた。自己有用感を育み、主体的に学習に取り組めるようにすることも重要であると感じた。

(2) かきつばたスタンダードの課題 き：「聞く」「話す」「書く」 学習スキルの習得を！

「話す」については、これまでも「話す」ことを意識した取組を行ってきており、自分の思いや考えを発表できる生徒が多い。しかし、生徒の話し合いの様子を見てみると、自分の発表に夢中で、人の意見を聞き、思いや気持ちを考えることはあまりできてはいない。このことは、発言者からすれば「聞いてもらえない」という思いにもつながる。そこで、「聞く」学習スキルの習得を喫緊の課題として取り組みたい。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

現職教育で前田勝洋先生をお招きし、「生徒のやる気と自覚を育てるー学級づくり・授業づくりをどう実践するかー」というテーマで講話をいただいた。授業の主役



【前田先生の熱いご指導】

は子どもであるが、授業を作るのは教師であることと、私たち教師が気を付けておきたい点について教えていただいた。「ありがたい飛び交う教室」「まちがいがこわくない教室」など、子どもがやる気になる教室作りの重要性を教えていただき、私たちのあるべき姿勢を示していただくとともに、「アイコンタクト」など、学級づくり・授業づくりの具体的な手だてを示していただいた。

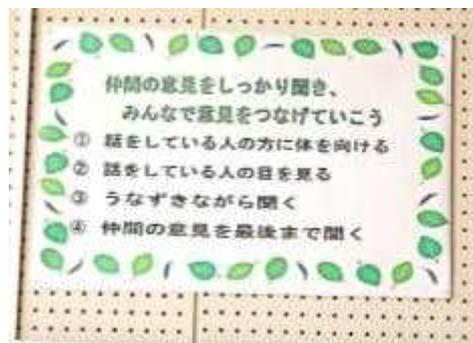
(2) 学校全体での取組

研究主題のサブテーマを「子どもの声を大切にす
る授業をめざして」として、「聞く」ことを重視し
て研究に絞り込んだ。

主題全体会で、授業において、教師も子どもも意
識すべきことをまとめ、すべての教室に掲示をした。
さらに、教科部会で、それぞれの教科での取組を検
討した。

また、指導案にも、本単元でどのよ
うに「聞く」を展開し、子どもたちを
生かすかを、「子どもの声を大切にす
る授業」として記述し、本時の展開に
は「◎子どもの声」を設け、子どもの
声を大切にするための手だてを記述す
ることにした。

このように、すべての授業で「聞く」
を通して子どもたちの声を大切にす
る取組を始め、2つの全体授業と教科ご
とに研究授業会を設け実践した。



【授業の約束 教室掲示】

(4) 子どもの声を大切にす (話を聞く) 授業

トリック図線を見たとき、どうしても自分の見方にしぼられる。見方や考え方を広げさせるために、生徒同士で他の見方を伝え合う場面を設ける。

(3) 学習過程

	学習活動	教師の支援
つかむ	1 「ちょっと立ち止まって」の題名からの予想読みをする。	・内容に興味をもてるようにするため、「ちょっと立ち止まって」の後にどんな言葉が続くか予想させる。
深める	3 他のトリック図線を見て、見えてくるものを話し合う。 ・黒い部分に着目すると、字が浮かび上がってくる。 ・ウサギとアヒルが見える。教科書のおばあさんと若い女性の二通りに見える図と見え方が似ている。	◎見方の違いに気づけるように、生徒同士で見え方の違いを教え合う時間を設ける。 ・説明に困っている生徒には、2の教科書の三点の図の見え方を参考に説明するように声をかける。

【子どもの声を大切にす指導案】

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 1年数学「たくさん見つかった！カレンダーの規則性」(文字の式) 則竹 志保 教諭

マーケティング・ディスカッション法を取り入れ、分担して各班をまわって説明を聞き、それを持ち寄り、自分たちの班の考えを修正したり深めたりした。聞く生徒は、戻って班で発表しなければならないので、分からない部分は質問をするなどして理解していた。一方、各班の発表者は、しっかり聞いてもらえるので安心して、しかも、より分かりやすい発表をしようと資料を活用したり、具体的に数字を書いて説明したりするなど、意欲的であった。



【他の班の生徒に説明をする様子】

(2) 2年理科「あなたの家の電気はどっち？直列回路と並列回路」 井口 裕大 教諭

目に見えない電気を扱う授業では、理解が困難で自信がもてないため、発言が極端に少なくなりがちである。また、数少ない発言でも、根拠のないYES・NO的なものになってしまったり、根拠を述べても、その発言内容がつかみにくかったりして話し合いとはならないことが多かった。そこで、電気エネルギーを視覚化する実験や教具をたくさん用意し、生徒が電気をイメージしやすくした。その結果、自分なりの仮説を立てたり、仲間と検討をしたりしやすくなり、グループでの意見交流が活発になった。



【自作教具を使って実験をする生徒】

(3) 3年道徳「人生を開く」1ー(4)理想の実現 角野 安彦 教諭

広げる・深める段階で、本資料「道はすべての人の前にひらかれている」を参考にして、自らを振り返り、自分なりの思いや考えを発表する活動を設定した。個々が考える時間を経た後、全員がグループ内で発表する時間では、一人一人の発表に感嘆の声が上がるなど発表者に温かい雰囲気の中での発表会となっていた。続いて、学級全体での発表の時間となると、クラス内のほとんどの生徒が発表しようと挙手をしていた。学級発表も、グループ内発表同様の雰囲気が進み、「～さんと似てるけど、……」とか「～さんとは全く逆で、……」と、他の生徒の発表を受けて自分の考えを発表していた。ご指導を受けた前田勝洋先生からは「どのクラスでもできる授業じゃない。しっかりと聞いてくれる仲間だから、どの発表者も照れたり恥ずかしがったりすることもなく自分の思いをしっかりと伝えることができていた」との評価をいただいた。



【自分の格言をクラスに発表する生徒】

4. 今後の課題

教師だけでなく、生徒同士でも「相手の話をしっかり聞く」ということを意識して授業を中心に教育活動を展開してきた。すると、まず学級、学年、そして、学校の雰囲気が温かいものになってきた。そして、自分の思いを部活動やクラスで表現する生徒が増えてきた。さらに、学年や全校にも自分の思いや考えを伝える生徒も出てきた。学校の行事などは本当に生徒主体の活動となってきた。授業でも、発言が増え、意欲的に授業に参加する生徒が増えてきた。前田先生にご示唆いただいた「まちがいがこわくない学級・学校づくり」が少しできてきたように思う。現在、各教科での手立ての有効性をまとめている。どの教科でも活用できるもの、他の教科でもアレンジできそうなものなどをまとめ、全体で取組の充実を図りたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立竜北中学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

平成27年度全国学力・学習状況調査の結果をみると、正答率は全国平均に比べ、国語A(+3.4%)国語B(+2.9%)数学A(+2.9%)数学B(+2.9%)理科(+4.9%)と全国平均を上回っている。しかし、設問ごとに細かく分析をすると以下のような弱いところが見つかった。

- ・国語A：品詞の類別や手紙の書き方（知識・理解）
- ・国語B：効果的な資料を作成し、活用して話す（話す・聞く）
- ・数学A：空間図形の形や多角形の内角の和の性質（知識・理解）
- ・数学B：事柄が成り立つ理由を構想を立てて、説明すること（数学的な見方・考え方）
- ・理科：他者の考えを検討し改善し、化学変化を説明すること（主として活用）

以上から課題として、基礎基本の定着とそれを基盤として活用する力を身に付ける必要性が感じられた。

(2) かきつばたスタンダードの課題

- ・言語活動の基幹となる「聞く」「話す」「書く」の学習スキルの習得・向上への取組は急務である。「き」
- ・「読む」あるいは「読み取る」能力を、話し合い、伝え合い、学び合う中で高めたい。「つ」

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

講師の先生を招き、教員研修を充実させ、教員の指導力や資質の向上を図った。具体的な授業の進め方や指導法の工夫についての講義とワークショップ形式の学びを行い、授業にいたるまでの4段階のスマールステップについて、どの教員も納得するこ



【ワークショップ形式の研修】

とができた。生徒の学ぶ力を育てるためには学習に対する動機付けが大切である。魅力的な単元導入や教材開発に努め、生徒の「はてな」「なぜ」などの疑問が生じるような授業の工夫を今後図っていきたい。教師が提示方法や発問の工夫をすることで、アクティブな思考継続ができる。ワークショップ形式での話し合いを行ったため、教師も「自分なら」などの視点で学びを深めるなど有意義な時間であった。

(2) 学校全体での取組

学習規律を身に付けさせ、学習活動を適切で効率的に進め基礎基本の定着を図るように努めた。教科によっては、少人数指導に取り組み、一人一人の学習のつまずきの把握と解消に努め、基礎学力遅進生徒を中心に基礎学力の向上を図った。そのため、個の学習意欲喚起と達成感を味わわせることができ、継続して取り組んだことで「わたしもできるんだ」という生徒の学習に対する自己肯定感をもたせることができた。



【授業中の様子】

(3) 家庭への働きかけ

学校だよりや保健だより、学年通信やHPで、家庭学習や規則正しい生活習慣の意義を説明し、定着への協力を促した。また、毎日、家庭学習の提出を点検し、家庭学習への取組状況の把握と評価を繰り返し、意欲の向上を図った。

3. 取組の成果の把握・検証

- ・思考の足跡が残り「ふり返し」ができる板書計画を充実させ、次事への意欲をかき立てることができた。**ば**
- ・教師は、板書を通して、授業全体の流れや生徒の思考を予想することで、指導法の工夫・改善に取り組むことができた。**ば**
- ・「『個』の困り感に寄り添う支援」の工夫により、一人一人にあった学習支援を行うことができた。**た**



【板書の工夫】

4. 今後の課題

授業を進めるにあたっては、教師の力量によるところが大きい。「考え、議論する授業」への転換に向けて、今後も学校全体での取組や外部講師による指導の機会を増やし、力量向上に繋げたい。

また、『全国学力・学習状況調査』や『学習指導チェックシート』から見られた生徒の実態から、「個」を伸ばす場面を授業内に設定し、生徒も教師も日常的に意識した授業を実践していきたい。

生徒の様子	支援
目的地までの乗り物での行き方が地図から読み取れない	地図上で、「使用する乗り物」「降りる場所」「所要時間」を確認し、パターンプラクティスの板書に当てはめて英文を考えるよう促す。
英文法が間違っている	間違っている箇所を指摘し、グループで再度考えるよう促す。
新たな表現に挑戦したいが単語が分からない	和英辞典を配付し、英単語を調べるよう促す。
新たな表現に挑戦したいが、文法が分からない	二文で表現してみる、または、意味が変わらないように既習の英文法で工夫して表現するよう促す。

【「個」の困り感に寄り添う支援の一例】

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	知立市立知立南中学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

(1) 学力調査等から

学力下位層の生徒が多いので、基礎学力の確実な定着を図るとともに、少人数指導や個別指導を充実させていく必要がある。家で学校の授業の復習をしている生徒の割合も低いので、きちんとした生活習慣が定着するように指導をしたい。

(2) かきつばたスタンダードの課題

知立市のかきつばたスタンダードの5つの観点の中で本校は、「子ども自身が評価する振り返り」と「考えを深めていく主体的な授業づくり」に重点に置く。

課題を設定し、生徒が学びの過程を振り返る場を必ず設けるようにする。そして、単元の中にアクティブ・ラーニングの手法を取り入れることで、能動的な授業をめざす。話し合いで、考えを深めていく主体的な授業づくりを続けていけば、生徒の学力がより向上すると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 教師の授業力向上に向けての取組

8月の現職教育 講師からの講話を聞き、主体的な授業のためには、教師が変わっていかなければならないことを学んだ。

(2) 学校全体での取組

月	基礎学力の定着に関する内容	備考
4月	全国学力・学習状況調査、全国標準学力検査（NRT）	新1年生の実態把握
5月	主題推進委員会	今年度の研究の方向の確認
8月	現職教育（学力向上・アクティブ・ラーニング・評価） についての研修会 学力向上に関する講話 講師 中部大学准教授 小笠原豊	校内の先生を講師としての学習会 教員の指導力向上・講師の招聘

9月	主題研究授業 国語 新庄健史教諭 講師 安城中部小学校長 石川良一	教員の指導力向上・講師の招聘
10月	主題研究授業 社会 国塚雄樹教諭 講師 愛知教育大学教授 野田敦敬	教員の指導力向上・講師の招聘
12月	主題研究授業 理科 神谷宏美教諭 講師 愛知県総合教育センター研究指導主事 吉富 靖	教員の指導力向上・講師の招聘
2月	主題推進委員会（紀要について）	
3月	来年度に向けてのアンケートの実施	

（生徒が主体的に取り組めたかという視点から）

9月 3年 国語「和歌でわかろう 日本人の心」について

主体的な学習、アクティブ・ラーニング的な学習にするためには、生徒たちにとって適切なレベルの課題であるか、また、できるだけ興味や関心が湧いてくる「自分事」の課題であることが望ましいがその点に課題が残った。アクティブ・ラーニングを実現する手段として学習ボードを使用した。今回、学習ボードを活用したことでグループでの話し合いを焦点化することができ、効果的に活用することができた。しかし、グループ活動でのよりよい活用方法、発表での活用の有無については、さらに研究を進める必要があると感じた。

10月 1年 社会「移民大国アメリカの光と影 ～北アメリカ州」について

アクティブ・ラーニングを行う前提として、ある一定の学習スキル・学習マナーが教室に存在することが望ましいが、それがいろいろな場面で見られ、生徒が主体的に活動できた。授業内容について、課題の提示や、資料の提示について、授業者の言葉がけ一つ一つに意味があり、工夫がされ、それが生徒たちの「アクティブな思考」を促していた。

12月 2年 理科「リニアモーターカー不思議発見!？」について

「ミニリニモ」という教材は、理科が苦手な生徒にも「動かしてみたい」という気持ちにさせるもので、生徒たちが「どうして?」と考えることができるアクティブな授業であった。

生徒の小さなつぶやきを教師が取り上げ、全体に伝えていたので、生徒が「他者に認められる」ことで、生き生きと活動し、「生徒と作り上げる授業」となった。「ミニリニモ」の提示は、生徒が「なぜ?」と強く思える内容であったので、生徒の興味を引き付ける導入としては、とてもよかった。

3. 取組の成果の把握・検証

- ・教師の意識も学力を総合的にとらえ、授業を改善することが大事だという意識に変わってきている。
- ・主体的な授業・アクティブな思考、振り返りをするものの意義を考えることで、意欲的に取り組む生徒が少しずつ増えてきたように感じる。

4. 今後の課題

- ・生徒の主体的な取組がみられるようになってきたが、課題を生徒の意欲・関心に合わせて設

定しないと意欲的になれないことが多いので、学習が持続するように十分吟味して課題を設定したい。また、宿題や家庭学習についての家庭の意識がまだまだ高くないので、引き続き機会をとらえて啓発を続けたい。